

埃 倉 遺 跡
鐘 打 東 遺 跡
埃 倉 西 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第416集

埃^{ごみ}倉^{くら}遺跡
鐘^{かね}打^{うち}東^{ひがし}遺跡
埃^{ごみ}倉^{くら}西^{にし}遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所による一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した、茨城県坂東市埃倉遺跡・鐘打東遺跡・埃倉西遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、縄文時代の陥し穴や奈良時代の竪穴建物跡などが確認でき、当時の人々の暮らしの様相などが明らかになりました。これらの成果は、当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上で、欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります国土交通省関東地方整備局常総国道事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、坂東市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 野口 通

例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成24年度に発掘調査を実施した茨城県坂東市弓田字埃倉3479-2番地ほか²⁶⁶⁶⁶に所在する埃倉遺跡と、平成25年度に発掘調査を実施した茨城県坂東市弓田字猪子1246-2番地ほか²⁶⁶⁶⁶に所在する鐘打東遺跡と、平成26年度に発掘調査を実施した茨城県坂東市弓田字埃倉3462-3番地ほか²⁶⁶⁶⁶に所在する埃倉西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成24・25・26年度

埃倉遺跡 平成24年6月1日～6月30日
鐘打東遺跡 平成25年9月1日～10月31日
埃倉西遺跡 平成26年9月1日～10月31日

整理 平成28年度

埃倉遺跡・鐘打東遺跡・埃倉西遺跡 平成28年4月1日～7月31日
- 3 発掘調査は、平成24年度が調査課長櫻村宣行、平成25・26年度が調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

平成24年度（埃倉遺跡）

首席調査員兼班長 皆川 修
次 席 調 査 員 駒澤悦郎
調 査 員 長洲正博

平成25年度（鐘打東遺跡）

首席調査員兼班長 綿引英樹
次 席 調 査 員 齋藤和浩
調 査 員 内田勇樹

平成26年度（埃倉西遺跡）

首席調査員兼班長 寺内久永
首 席 調 査 員 奥沢哲也
調 査 員 根本康弘
- 4 本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員天野早苗が担当した。

凡 例

- 1 各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、埃倉遺跡は $X = + 9,040 \text{ m}$ 、 $Y = + 7,160 \text{ m}$ の交点を、鎌打東遺跡は $X = + 9,360 \text{ m}$ 、 $Y = + 6,240 \text{ m}$ の交点を、埃倉西遺跡は $X = + 9,240 \text{ m}$ 、 $Y = + 6,760 \text{ m}$ の交点をそれぞれ基準点（A 1a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P-ピット SD-溝跡 SI-堅穴建物跡 SK-土坑 TP-陥し穴
遺物 DP-土製品 Q-石器
土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 赤彩  炉・火床面・織維土器断面
 竈部材・粘土範囲  油煙
●土器 ○土製品 □石器 - - - - 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は[]を付して示した。
- (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 主軸方向は、堅穴建物跡、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 $N - 10^\circ - E$ ）。

- 7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

埃倉遺跡 変更 SK42 → TP 1
欠番 SK23・51
鎌打東遺跡 変更 FP 1 → SK62 SK20 → TP 1

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
埃倉遺跡・鎌打東遺跡・埃倉西遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 埃倉遺跡	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	14
1 縄文時代の遺構と遺物	14
(1) 陥し穴	14
(2) 土坑	15
2 奈良時代の遺構と遺物	18
竪穴建物跡	18
3 その他の遺構と遺物	21
(1) 土坑	21
(2) 溝跡	22
(3) 遺構外出土遺物	23
第4節 まとめ	24
第4章 鎌打東遺跡	26
第1節 調査の概要	26
第2節 基本層序	26
第3節 遺構と遺物	30
1 縄文時代の遺構と遺物	30
陥し穴	30
2 その他の遺構と遺物	30
(1) 土坑	31
(2) 溝跡	32

(3) 遺構外出土遺物	33
第4節 まとめ	34
第5章 埃倉西遺跡	35
第1節 調査の概要	35
第2節 基本層序	35
第3節 遺構と遺物	39
1 縄文時代の遺構と遺物	39
(1) 竪穴建物跡	39
(2) 土坑	42
2 その他の遺構と遺物	47
(1) 土坑	47
(2) 溝跡	48
(3) 遺構外出土遺物	48
第4節 まとめ	50
写真図版	PL 1～PL 9
抄 録	

ごみくろ かねうち ひがし ごみくろにし 埃倉遺跡・鐘打東遺跡・埃倉西遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

埃倉遺跡・鐘打東遺跡・埃倉西遺跡は、坂東市の北東部に位置し、飯沼川の支流である立川右岸の標高13～17mの台地縁辺部に立地しています。

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設事業に先立ち、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成24年度に埃倉遺跡の643㎡、平成25年度に鐘打東遺跡の2,221㎡、平成26年度に埃倉西遺跡の2,797㎡について発掘調査を行いました。



埃倉遺跡の調査の内容と成果

調査の結果、竪穴建物跡1棟（奈良時代）、陥し穴1基（縄文時代）、土坑48基（縄文時代5、時期不明43）、溝跡1条（時期不明）を確認しました。主な出土遺物は縄文土器（深鉢）、土師器（坏・甕）、須恵器（小形短頸壺・蓋・甕）、石器（鎌）、土製品（支脚）などです。縄文時代の陥し穴や鎌を確認していることから、当時は周辺地域を含め狩猟の場として利用されていたと考えられます。

また、土師器の坏や須恵器の小形短頸壺、土製の支脚などが出土している奈良時代の竪穴建物跡も確認でき、調査区域外の南西側に集落が広がっていく可能性があります。



埃倉遺跡調査区全景（西から）



第1号竪穴建物跡から出土した遺物

鐘打東遺跡の調査の内容と成果

調査の結果、陥し穴1基（縄文時代）、土坑61基（時期不明）、溝跡5条（時期不明）を確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、土師質土器（焙烙）などです。確認できた遺構は少ないですが、縄文時代には狩猟の場として利用されていたと考えられます。また、縄文時代前期の土器が多く採集され、周辺の遺跡からは地点貝塚が確認されていることなどから、当時は内海が周辺まで広がっていたと考えられます。



鐘打東遺跡調査区全景（上空から）

埃倉西遺跡の調査の内容と成果

調査の結果、竪穴建物跡1棟（縄文時代）、土坑29基（縄文時代6、時期不明23）、溝跡1条（時期不明）を確認しました。主な出土遺物は縄文土器（深鉢・浅鉢）、土製品（乳棒状土製品）、石器（鏃・敲石）などです。

縄文時代の竪穴建物跡からは、縄文土器（深鉢）の他に、棒状の土製品が出土しています。機能は不明ですが、端部に擦っている跡が確認できることから乳棒のような用途が想定されます。また、石核や剥片も出土していることから、建物の内部で石器を製作していた可能性があります。調査区域内からは、縄文土器片が多く出土しており、調査区域外には縄文時代の集落が形成されていたと考えられます。



乳棒状の土製品



調査区域内から出土した鏃

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所は首都圏へのアクセスを円滑にするために坂東市において一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の整備を進めている。

平成18年8月21日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無、及びその取扱いについて照会した。これを受けて、茨城県教育委員会は平成19年1月16・17日に現地踏査を実施し、埃倉遺跡については平成23年8月9日に、鐘打東遺跡については平成23年11月8・9日に、埃倉西遺跡については平成25年5月28日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

茨城県教育委員会教育長は、埃倉遺跡については平成23年9月16日に、鐘打東遺跡については平成24年1月6日に、埃倉西遺跡については平成25年6月13日に、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、事業地内に遺跡が所在すること、及びその取扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、埃倉遺跡及び鐘打東遺跡については平成24年2月9日に、埃倉西遺跡については平成26年2月18日に、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、埃倉遺跡及び鐘打東遺跡については平成24年2月20日に、埃倉西遺跡については平成26年3月5日に、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、埃倉遺跡及び鐘打東遺跡については平成24年2月23日に、埃倉西遺跡については平成26年3月10日に、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。茨城県教育委員会教育長は国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、埃倉遺跡及び鐘打東遺跡については平成24年2月24日に、埃倉西遺跡については平成26年3月10日に、各遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、埃倉遺跡については平成24年6月1日から30日まで、鐘打東遺跡については平成25年9月1日から10月31日まで、埃倉西遺跡については平成26年9月1日から10月31日まで、それぞれ発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

埃倉遺跡の調査は、平成24年6月1日から6月30日までの1か月間、鎌打東遺跡の調査は平成25年9月1日から10月31日までの2か月間、埃倉西遺跡の調査は平成26年9月1日から10月31日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

埃倉遺跡 平成24年度調査

工程	期間	6月			
調査遺構	準備 土除 確認	■			
遺構調査			■	■	
遺物写真	洗浄 整理		■	■	
撤収					■

鎌打東遺跡 平成25年度調査

工程	期間	9月				10月			
調査遺構	準備 土除 確認	■	■						
遺構調査				■	■	■	■	■	■
遺物写真	洗浄 整理			■	■	■	■	■	■
撤収									■

埃倉西遺跡 平成26年度調査

工程	期間	9月				10月			
調査遺構	準備 土除 確認	■	■						
遺構調査				■	■	■	■	■	■
遺物写真	洗浄 整理			■	■	■	■	■	■
撤収									■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

埃倉遺跡は茨城県坂東市弓田字埃倉 3479 - 2 番地ほかに、鎌打東遺跡は茨城県坂東市弓田字猪子 1246 - 2 番地ほかに、埃倉西遺跡は茨城県坂東市弓田字埃倉 3462 - 3 番地ほかに所在している。

坂東市は、茨城県南西部に位置しており、市域は南北に長い。茨城県南西部には、関東平野のほぼ中央に位置する猿島台地が広がっており、坂東市は猿島台地のほぼ中央に位置している。周辺の地勢は標高 18 ~ 20 m ほどの洪積台地である猿島台地と、周辺の利根川や江川、飯沼川及びそれらの支流によって開析された谷津が樹枝状に入り込んだ標高 7 ~ 10 m の沖積低地とに大別される。

猿島台地は、貝化石を含む海成層の成田層を基部としており、その上には竜ヶ崎砂礫層があり、さらにその上には灰白色の粘土層である常総粘土層が堆積している。そして、表土の下は厚さ 2 ~ 3 m の褐色の関東ローム層が堆積している¹⁾。

埃倉遺跡、鎌打東遺跡、埃倉西遺跡は北から南流する江川と飯沼川によって分断された舌状台地上に立地している。台地はさらに、立川などの小河川によっていくつもの小台地に区分されており、3 遺跡は立川と江川に挟まれた標高 13 ~ 17 m の台地の北東端に位置している。立川は東側を南流する西仁達川と合流し、さらに西仁達川は飯沼川と合流している。調査前の現況は畑地・山林である。

第2節 歴史的環境

埃倉遺跡・鎌打東遺跡・埃倉西遺跡が所在する猿島台地は、飯沼川や江川などの大小河川によって開析された谷津によって小台地面に分断されている。各時代の遺跡はこれらの台地上や谷部にむかう台地縁辺部で多く確認されている。ここでは 3 遺跡に関連する周辺遺跡について、時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡は、江川右岸の馬立原遺跡²⁾ (27) において頁岩製の剥片が出土しており、小規模な石器製作跡が確認されている。また、馬立原遺跡から南南東に 6.5 km ほどの地点に位置する北前遺跡³⁾ では瑪瑙・チャート・安山岩製のスクレイパーや、頁岩を主とした剥片などが出土している。さらに北前遺跡に隣接する高崎貝塚⁴⁾ からも安山岩製のスクレイパーなどが出土している。

縄文時代の遺跡は猿島台地全域で数多く確認されている。早期の遺跡は坂東市内において南原遺跡、台島北遺跡で、条痕文系土器が確認されているほか、埃倉遺跡の北に位置する塚越南遺跡 (11) で摺余文系土器が確認されている。立川左岸には然山遺跡 (18)、然山西遺跡⁵⁾ (19)、塚越南遺跡、塚越西遺跡 (6)、塚越東遺跡 (9) があり、また、立川の上流で分岐する小城谷津西岸には小城北遺跡 (5) がある。埃倉遺跡の東側に位置する然山西遺跡では、竪穴建物跡の他に地点貝塚が 3 か所確認されており、当時は周辺まで内海が広がっていたと推測される。台地南端部に入り込む桃ノ木遺跡 (17)、釜前遺跡 (16)、鳥ノ小島遺跡 (21)、内野山小学校遺跡 (15)、内野山柿沢遺跡 (14) でそれぞれ前期の遺物が採集されている。中期の遺跡は、立川左岸に釜前遺跡と鳥ノ小島遺跡があり、埃倉遺跡の南方に位置する駒寄遺跡 (23) でも中期の遺物が確認されている。後期の遺跡は小城北遺跡や隣接する小城南遺跡、立川上流より北部にある神明谷津の東岸で向原中遺跡 (40)、内野山柿沢遺跡、桃ノ木遺跡、釜前遺跡、刈浜遺跡 (13) などが確認されている。

弥生時代の遺跡は少なく、埃倉遺跡から南に3kmほどの地点に位置する姥ヶ谷津遺跡⁶⁾で堅穴建物跡1棟が確認されているほかは、小城北遺跡や立川右岸に位置する向原南遺跡(39)、向原中遺跡で遺物が採集されているのみである。

古墳時代の遺跡は、弥生時代に比べ増加し、立川沿岸の台地でも多くが確認されている。古墳時代前期の遺跡は桃ノ木遺跡、釜前遺跡、内野山小学校遺跡、内野山柿沢遺跡があり、後期の遺跡では鳥ノ小島遺跡、内野山柿沢遺跡がある。また、大杉古墳(10)、駒寄塚古墳⁷⁾(22)、高山古墳⁸⁾(29)が存在している。立川左岸にある大杉古墳は現在は前方部が削平されているもの、全長約30mの前方後円墳と推測されている。駒寄塚古墳は、墳丘及び周溝の痕跡、埋葬品は確認されていないが、筑波山麓産の雲母片岩の板石を用いた箱式石棺であることが判明している。高山古墳は、筑波山麓産の雲母片岩を用いた横穴式石室で、石室内からは人骨とともに直刀、勾玉、管玉などが出土している。塚越塚遺跡(12)は、大部分は削平されているが、わずかに墳丘の高まりは確認されている。

奈良・平安時代の当地域は、猿島郡葦津郷に属している。遺跡は、当遺跡周辺では小城南遺跡、内野山小学校遺跡が確認されている程度で、立川と飯沼川に挟まれた台地では減少している。一方、鎌打東遺跡の西方の江川周辺では西遺跡(31)、新屋敷遺跡(33)、正光院跡遺跡(34)、宮内遺跡⁹⁾ 30(32)が確認されており、古墳時代に引き続いて集落が営まれている。平成22年、平成24～25年に当財団が発掘調査を行った宮内遺跡では、古墳時代から平安時代までの堅穴建物跡が数多く確認されている。また、大量の鉄滓が出土しているほか、鍛冶工場の跡が確認できていることから製鉄に関連する集落であったということが指摘されている。鎌倉時代の立川左岸の周辺は、平符門を討伐した秀郷流藤原一族によって開墾された荘園である下河辺氏の下河辺荘に属した。その後の北条氏の時代には幸嶋氏が台頭し、領地としている。

戦国時代には猿島台地上に大塚城、菅生城などの城館が設けられ、当遺跡の南には弓田城跡(20)が存在している。「下総國舊事考」によると弓田城の築城者は伊勢備中守であるとされ⁷⁾、小田原北条氏との関連が推測されている。弓田城跡には現在も堀と土塁が良好な状態で残されている。

江戸時代では、享保年間に飯沼川周辺は周辺の要請から新田開発が大規模に行われたことが分かっており、新田の維持や改良は明治時代以降も続けられ、現在も豊かな水田地帯が広がっている。

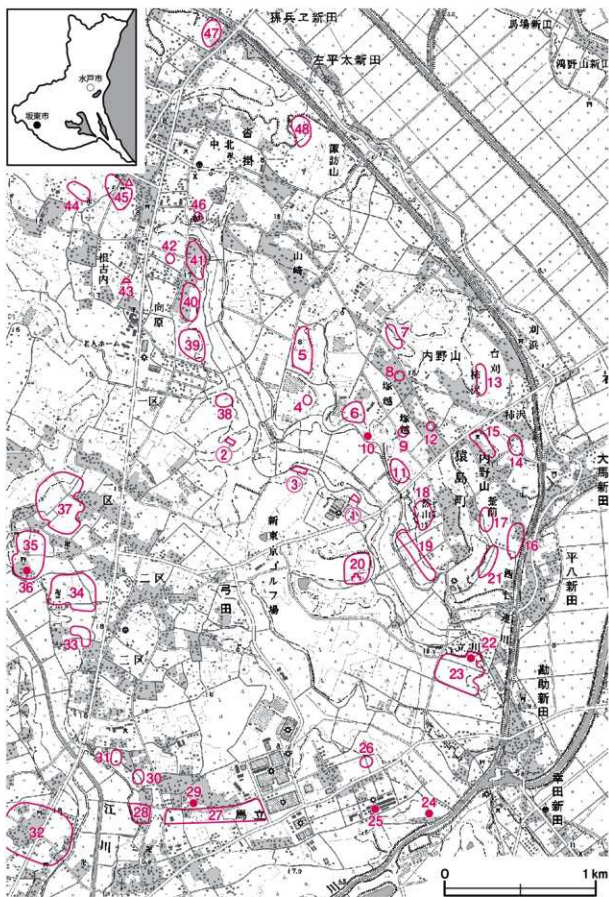
※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の当該番号と同じである。

註

- 1) 茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 水海道』 1985年12月
- 2) 中泉雄太「馬立原遺跡 馬立原西遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第402集 2015年3月
- 3) 大森雅之「原口遺跡 北前遺跡 茨城県自然史博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集 1993年3月
- 4) 鶴見貞雄「高崎貝塚 茨城県自然史博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第88集 1994年3月
- 5) 小川貴行 田村雅樹 佐藤一也「然山西遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第379集 2013年3月
- 6) 中村敬治「姥ヶ谷津遺跡 南間遺跡 岩井幸田工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第89集 1994年3月
- 7) 岩井市史編さん委員会『岩井市史（考古編）』岩井市 1999年3月
- 8) 三木ますみ「2. 高山古墳 岩井市の遺跡」『岩井市遺跡発掘調査報告書』第1集 1992年3月
- 9) 小林和彦 宮崎剛「宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第359集 2012年3月
- 10) 舟橋理 長洲正博 大島孝博「宮内遺跡2 長右衛門元屋敷遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第387集 2014年3月

参考文献

- ・岩井市史編さん委員会『岩井市史（通史編）』岩井市 2001年3月



第1図 埃倉遺跡・鐘打東遺跡・埃倉西遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院25,000分の1「石下」「水海道」)

表1 埃倉遺跡・鐘打東遺跡・埃倉西遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	埃倉遺跡		○			○		25	馬立中の台古墳群				○			
②	鐘打東遺跡		○					26	馬立中の台遺跡				○			
③	埃倉西遺跡		○					27	馬立原遺跡	○	○			○	○	○
4	小城南遺跡		○		○	○		28	馬立原西遺跡				○	○	○	○
5	小城北遺跡		○	○	○			29	高山古墳				○			
6	塚越西遺跡		○					30	松業遺跡		○	○				
7	塚越浦遺跡		○		○			31	西遺跡					○		
8	塚越遺跡				○			32	宮内遺跡		○			○		
9	塚越東遺跡		○		○		○	33	新屋敷遺跡				○	○		
10	大杉古墳				○			34	正光院脇遺跡				○	○		
11	塚越南遺跡		○		○		○	35	談義所遺跡		○		○			
12	塚越塚遺跡				○			36	櫛山古墳群				○			
13	刈浜遺跡		○					37	長丁遺跡		○					
14	内野山柿沢遺跡		○		○			38	猪ノ子遺跡		○		○			
15	内野山小学校遺跡		○		○	○		39	向原南遺跡		○	○	○			
16	釜前遺跡		○		○		○	40	向原中遺跡		○	○	○			
17	桃ノ木遺跡		○		○			41	向原北遺跡		○					
18	然山遺跡		○		○			42	大日塚遺跡		○		○			○
19	然山西遺跡		○		○	○	○	43	根古内塚							○
20	弓田城跡		○			○		44	香掛西浦遺跡		○		○			
21	鳥ノ小島遺跡		○		○			45	神明遺跡 (神明貝塚)		○		○		○	○
22	駒寄塚古墳				○			46	見通遺跡		○		○			
23	駒寄遺跡		○		○			47	天神山遺跡		○		○			○
24	浅間塚古墳				○			48	三井遺跡		○		○	○		

第3章 埃 倉 遺 跡

第1節 調査の概要

埃倉遺跡は、坂東市の北東部に位置し、飯沼川の標高約13～17mの台地の縁辺部に立地している。東側には南流する立川があり、飯沼川を含めた3河川で囲まれた台地の北東端に位置している。調査面積は643m²で、今回の調査範囲から南西部へ遺跡が広がっていくと考えられる。調査前の現況は山林及び畑地である。

調査の結果、堅穴建物跡1棟（奈良時代）、陥し穴1基（縄文時代）、土坑48基（縄文時代5・時期不明43）、溝跡1条（時期不明）を確認した。

遺物は、収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・甕）、須恵器（小形短頸壺・蓋・甕）、土製品（支脚）、石器（鏃）などである。

第2節 基本層序

調査区西部の台地上の平坦面（A1c2区）にテストピットを設定し、基本土層（第2図）の観察を行った。

第1層は暗褐色を呈する表土層で、層厚は20～30cmである。

第2層は暗褐色を呈するローム層への漸移層上部である。ローム粒子を微量に含んでおり、粘性・締まりは普通で締まりは弱く、層厚は10～15cmである。

第3層はにぶい黄褐色を呈するローム層への漸移層下部である。ローム粒子を多量に含んでおり、粘性・締まりはともに普通で、層厚は10～18cmである。

第4層は褐色を呈するソフトローム層である。粘性は強く締まりは弱く、層厚は20～40cmである。

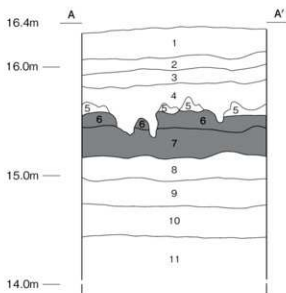
第5層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は5～10cmである。

第6層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。橙色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は10～15cmである。第2黒色帯の上部と考えられる。

第7層は暗褐色を呈するハードローム層である。橙色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は20～30cmである。第2黒色帯の下部と考えられる。

第8層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりはともに強く、層厚は20～28cmである。

第9層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量に含んでおり、粘性・締まりはともに強く、層厚は30cmである。

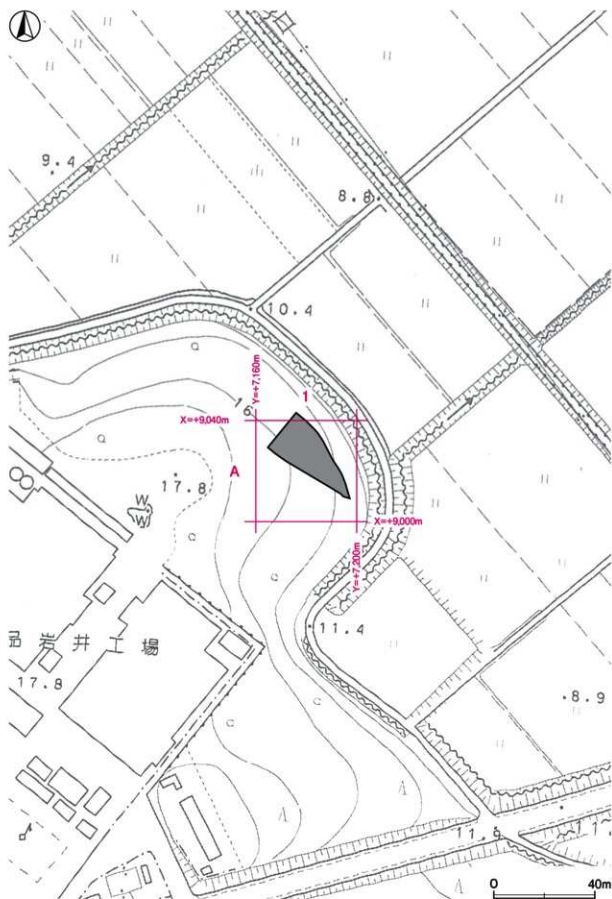


第2図 基本土層図

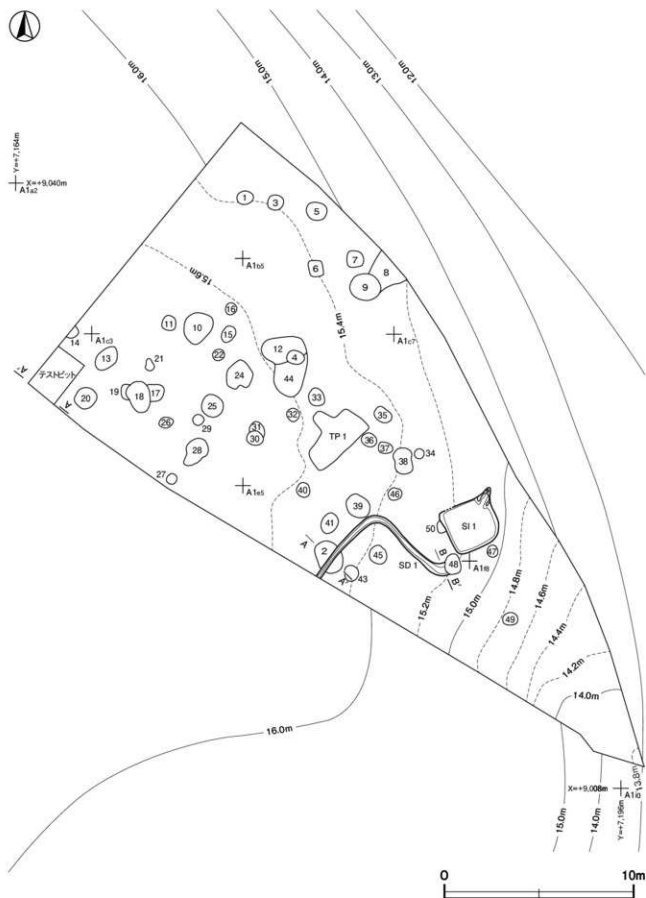
第10層は褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量に含み、粘性は非常に強く、締まりも強く、層厚は30cmである。

第11層は褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに非常に強い。層厚は25cmまで確認したが、下層が未掘のため層厚は不明である。

なお、遺構は第3層上面で確認した。



第3図 埃倉遺跡調査区設定図（坂東市都市計画図2,500分の1）



第4図 埃倉遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は陥し穴1基、土坑5基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 陥し穴

第1号陥し穴（第5図 PL1）

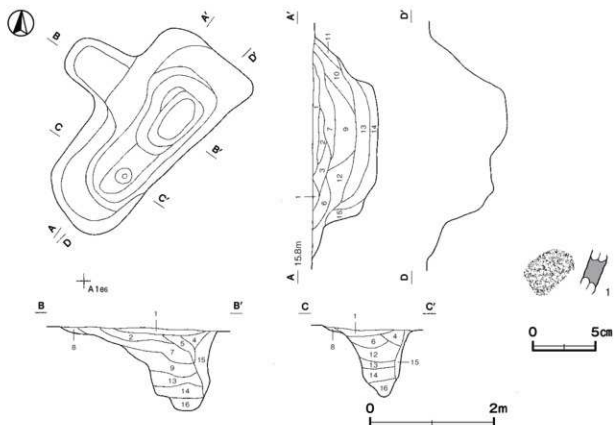
位置 調査区中央部のA1d6区、標高16mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸3.50m、短軸2.48mの不整形長方形で、長軸方向はN-42°-Eである。深さは125cmで、底面は段を有しており、壁はほぼ直立している。北西部の一部に張り出しを有しており、掘削作業時などに使用された足場の可能性がある。

覆土 16層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|----------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 にい黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 13 にい黄褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 にい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 にい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック微量 | 16 黒褐色 | ロームブロック微量 |



第5図 第1号陥し穴・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢)のほか、土師器片1点(甕)が覆土中から出土している。

所見 時期は形状から縄文時代と考えられる。

第1号陥し穴出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・織部	に濃い青	普通	早期縄文LR(横)	覆土中	PL.3

(2) 土坑

第9号土坑(第6図)

位置 調査区北部のA1b6区、標高15mほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第8号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.63m、短径1.38mの楕円形で、長径方向はN-71°-Wである。深さは28cmで、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

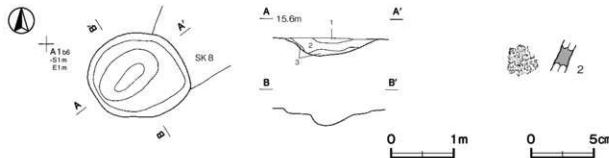
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢)が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



第6図 第9号土坑・出土遺物実測図

第9号土坑出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・織部	暗	普通	早期縄文LR(横)	覆土中	PL.3

第18号土坑(第7図)

位置 調査区南西部のA1c3区、標高16mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17・19号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.62m、短径1.22mの楕円形で、長径方向はN-16°-Wである。深さは52cmで、底面は皿状である。南部は中位に段を有し、テラス状となっている。壁は外傾している。

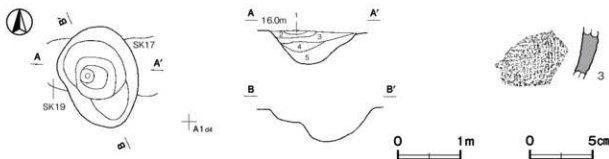
覆土 5層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子を含む層が不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 におい黄褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



第7図 第18号土坑・出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地質	文様の特徴ほか	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	-	-	-	赤石灰・雲母・磁石	におい橙	普通	無面縄文瓦（横）と無面縄文土（横）による羽状積乱	覆土中	PL. 3

第28号土坑（第8図）

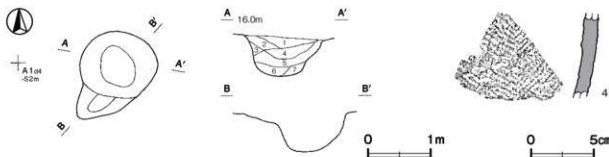
位置 調査区南西部のA1d4区、標高16mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.60m、短径1.12mの不定形で、長径方向はN-43°-Eである。深さは60cmで、底面は皿状である。南西の張り出し部はテラス状の段を有し、スロープ状となっている。壁は南壁を除いて、ほぼ直立している。

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 におい黄褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 におい黄褐色 ロームブロック少量 | 7 におい黄褐色 ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量 | |



第8図 第28号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片1点(深鉢)が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。

第28号土坑出土遺物観察表(第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
4	縄文土器	深鉢	-	-	-	長径・短径・赤色 粒子・縦線	にぶい橙	普通	単節縄文RLと単節縄文LRによる羽状構成	覆土中	PL.3

第35号土坑(第9図)

位置 調査区中央部のA1d6区。標高15mほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状 長径0.94m, 短径0.72mの楕円形で, 長径方向はN-43°-Wである。深さは16cmで, 底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

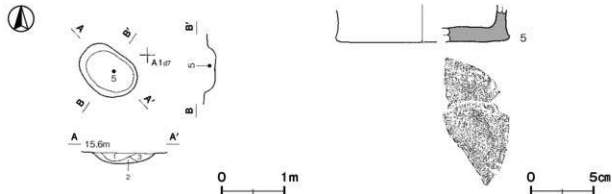
覆土 3層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 層 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 層 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 層 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢)が, 覆土中から出土している。5は覆土中層から出土しており, 埋め戻す過程で混入したと思われる。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



第9図 第35号土坑・出土遺物実測図

第35号土坑出土遺物観察表(第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
5	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	(1.8)	長径・短径・赤色 粒子・縦線	にぶい橙	普通	胴部下節無節縄文L(横)	覆土中層	5%

第39号土坑(第10図)

位置 調査区南西部のA1e6区。標高16mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.40m, 短径1.12mの楕円形で, 長径方向はN-43°-Wである。深さは56cmで, 底面は平坦である。壁は直立し, 上位で緩やかに傾斜している。

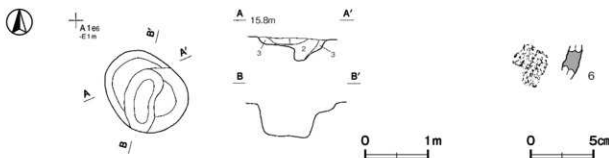
覆土 3層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子を含む層が不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック微量
3 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）のほか、土師器片2点（坏）が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



第10図 第39号土坑・出土遺物実測図

第39号土坑出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
6	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・磁面	橙	普通	無彫刻文し(横)	覆土中	PL.3

表2 縄文時代の土坑一覧表

番号	位置	長径(南)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
9	A 1 16	N-71°-W	楕円形	1.63 × 1.38	28	縦斜	原状	人為	縄文土器	SK 8 → 本跡
18	A 1 43	N-16°-W	楕円形	1.62 × 1.22	52	外傾	原状	人為	縄文土器	SK17・19 → 本跡
28	A 1 44	N-43°-E	不定形	1.60 × 1.12	60	ほぼ直立 縦斜	原状	人為	縄文土器	
35	A 1 45	N-43°-W	楕円形	0.94 × 0.72	16	縦斜	平坦	人為	縄文土器	
39	A 1 46	N-43°-W	楕円形	1.40 × 1.12	56	直立	平坦	人為	縄文土器	

2 奈良時代の遺構と遺物

当該時代の遺構は、堅穴建物跡1棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

堅穴建物跡

第1号型堅穴建物跡（第11・12図 PL 1・2）

位置 調査区南東部のA 1 e8区、標高15mほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第50号土坑を掘り込んでいる。

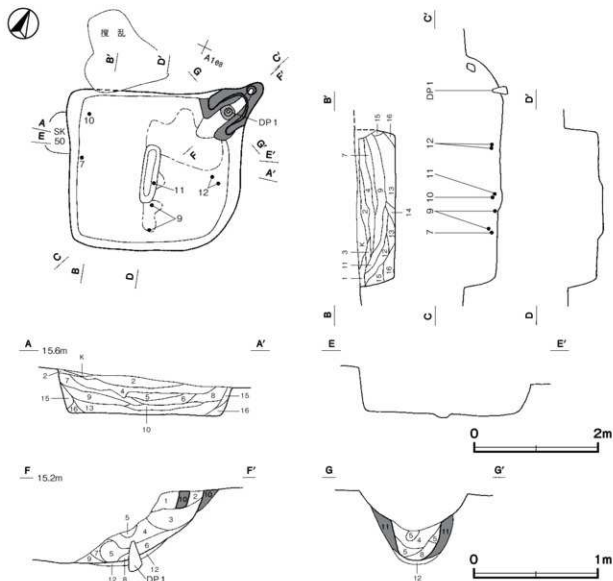
規模と形状 長軸2.72m、短軸2.51mの方形で、主軸方向はN-67°-Eである。壁は高さ47～70cmで、ほぼ直立している。

床 ほほ平坦で、竈の前面及び南東壁寄りが踏み固められている。中央部には、南北に長さ90cm、深さ10cm程度の溝が確認できた。断面は浅い皿状を呈している。

■ 北コーナー部に付設されている。規模は焚口部から煙道まで130cmで、燃焼部幅は20cmである。袖部は、灰白色粘土ブロックを多量に含む第11層で構築されている。火床部は、床面を4cmほど掘りくぼめ、焼土粒子やロームブロックを含む第12層を埋土として構築されている。火床面の赤変硬化は弱い。また、火床面には土製の支脚が12cmほど埋め込まれている。煙道部は壁外に34cm掘り込まれ、火床部から外傾している。煙道部の天井は崩落せずに残存しており、灰白色砂質粘土ブロックを多量に含む第10層で構築されている。第3～9層は内壁及び天井部の崩落土で、第1・2層は流入土である。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|------------------------------------|----|--------|------------------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色 | 灰白色砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 8 | 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 9 | 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 3 | 暗褐色 | 焼土ブロック・灰白色砂質粘土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 | 10 | 暗褐色 | 灰白色砂質粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 4 | 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物粒子微量 | 11 | にぶい赤褐色 | 灰白色砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、炭化物微量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土ブロック・灰白色砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 | 12 | にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、灰白色砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化材・ローム粒子微量 | | | |
| 7 | 暗褐色 | 灰白色砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | | | |



第11図 第1号竈穴建物跡実測図

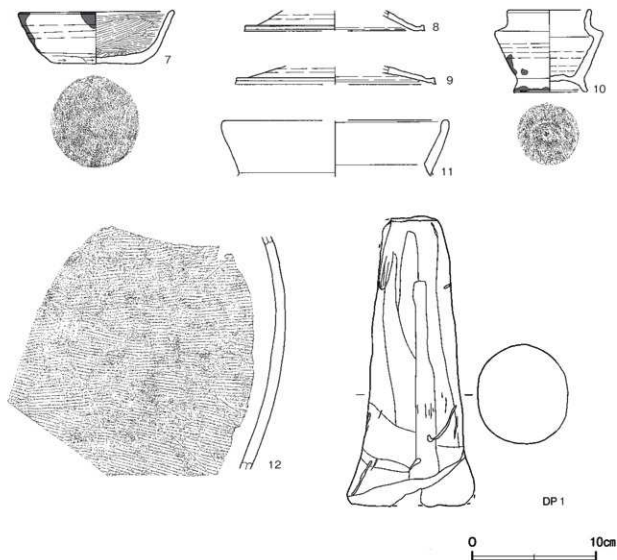
覆土 16層に分層できる。ほとんどの層にロームブロック、炭化物、焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化材微量	10 暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	11 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
4 黒褐色	炭化材中量、焼土ブロック少量、ロームブロック微量	12 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・炭化材少量、焼土粒子微量	13 にお・黄褐色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量
6 黒褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量	14 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
7 暗褐色	炭化材少量、ロームブロック・焼土粒子微量	15 にお・黄褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	16 にお・黄褐色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片7点（坏3、甕4）、須恵器片4点（小形短頸壺1、蓋2、甕1）、土製品1点（支脚）のほか、縄文土器片12点（深鉢）が出土している。土師器や須恵器が覆土下層から出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。7は西壁際から出土しており、油煙が付着していることから灯明具として利用されたと考えられる。DP1は竈内部に埋設された状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉に比定できる。



第12図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表(第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	土師器	坏	122	42	72	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端平持ちヘラナデ 底面顔位と内面にヘラナデ 内面顔位処理	覆土下層	20% 焼附片
8	須恵器	蓋	[144]	(1.6)	-	長石	灰	普通	外・内面にクロナデ	覆土中	5% 新出炭
9	須恵器	蓋	[160]	(1.4)	-	長石・石英	灰	普通	外・内面にクロナデ	覆土下層	20% 新出炭 系と同一形状
10	須恵器	小形 初瀬盆	6.3	6.5	5.8	長石・石英・雲母	灰	普通	底部へら切り	覆土下層	100% PL3 焼附片 新出炭
11	土師器	羹	[178]	(4.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ナデ	覆土下層	5%
12	須恵器	羹	-	-	-	長石・石英・雲	暗灰	普通	体部顔位の叩き目	覆土下層	新出炭

番号	器種	長さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP-1	支脚	23	[46]	10.1	(1198.3)	長石・石英・赤色 粘土	橙	横断面位のヘラナデ	竪内部	PL3

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない土坑43基と溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

土坑43基については、遺構全体図(第4図)と一覧表で掲載する。

表3 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径(幅)方向	平面形	規 規		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径(幅)×短径(幅)(m)	深さ(cm)					
1	A1a5	N-71°-E	楕円形	0.88 × 0.72	15	平坦	ほぼ直立	自然	土師器	
2	A1e6	N-17°-E	楕丸長方形	1.74 × 1.34	20	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	本跡→SD1
3	A1a5	-	円形	0.82 × 0.80	26	平坦	ほぼ直立	人為		
4	A1c5	N-83°-W	楕円形	0.92 × 0.82	39	趾状	外傾	自然		SK12・44→本跡
5	A1a5	N-63°-E	円形	1.12 × 0.98	14	平坦	ほぼ直立	自然		
6	A1b5	N-6°-E	方形	0.75 × 0.70	27	平坦	外傾 緩斜	人為		
7	A1b6	-	円形	0.96 × 0.92	24	平坦	外傾	自然	縄文土器	
8	A1b6	N-53°-E	不定形	1.28 × 2.00	12	平坦	外傾	自然	縄文土器、銅片	本跡→SK9
10	A1b4	N-38°-E	楕円形	1.74 × 1.40	10	平坦	外傾	人為		
11	A1b4	N-36°-W	楕円形	0.90 × 0.75	30	平坦	緩斜	人為		
12	A1c5	N-90°-E	不定形	2.38 × 1.50	10-20	平坦	外傾	自然		SK41→本跡→SK4
13	A1c3	N-32°-E	楕円形	1.38 × 1.04	30	平坦	外傾 緩斜	人為		
14	A1c2	N-67°-E	[楕円形]	(0.60) × 0.80	28	平坦	外傾	自然		
15	A1e4	N-22°-E	楕円形	0.80 × 0.63	14	平坦	外傾 緩斜	自然		
16	A1b4	-	円形	0.62 × 0.62	32	有段	外傾 緩斜	人為		
17	A1c3	N-84°-E	[楕円形]	(0.78) × 0.90	15	平坦	外傾 緩斜	自然		本跡→SK18
19	A1c3	-	[円形・楕円形]	(0.82) × (0.22)	12	平坦	外傾	人為	礎	本跡→SK18
20	A1c2	N-45°-E	楕丸長方形	1.16 × 1.02	9	平坦	外傾	自然		
21	A1c3	N-13°-W	不定形	0.66 × 0.48	13	趾状	外傾	人為		
22	A1e4	-	円形	0.66 × 0.62	55	有段	外傾 緩斜	人為	炭化材	
24	A1e4	N-45°-E	不定形	1.42 × 1.32	68	有段	外傾 緩斜	自然 人為		

番号	位置	長径(幅) 方向	平面形	縦		底面	横面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径(幅)×短径(幅)(m)	深さ (cm)					
25	A 1 e4	N-35°-W	楕円形	1.16 × 1.06	24	皿状	外堀	人為		
26	A 1 d3	N-66°-E	楕円形	0.75 × 0.50	12	平坦	はは直立	人為	銅片	
27	A 1 d4	-	円形	0.56 × 0.56	36	平坦	はは直立	人為		
29	A 1 d4	-	円形	0.58 × 0.56	20	皿状	直立 外堀	人為		
30	A 1 d5	N-50°-E	楕円形	0.84 × 0.74	44	皿状	外堀	人為		SI 31 → 本跡
31	A 1 d5	N-17°-E	[楕円形]	0.40 × 0.70	31	皿状	外堀	自然		本跡 → SK30
32	A 1 d5	-	円形	0.77 × 0.71	12	平坦	外堀 縦斜	自然		
33	A 1 e5	N-13°-W	楕円形	0.90 × 0.78	20	皿状	外堀	人為		
34	A 1 d7	N-14°-E	方形	0.50 × 0.50	24	平坦	直立 外堀	人為		
36	A 1 a6	N-51°-E	楕円形	0.82 × 0.72	20	平坦	外堀	人為		
37	A 1 a6	N-65°-W	楕円形	0.74 × 0.58	20	平坦	外堀	人為	礎	
38	A 1 d7	N-10°-W	不定形	1.40 × 1.00	13	平坦	はは直立	人為		
40	A 1 e5	N-5°-W	楕円形	0.84 × 0.72	32	皿状	外堀 縦斜	人為		
41	A 1 e6	N-22°-E	楕円形	1.06 × 0.82	30	平坦	外堀 縦斜	人為	銅片、礎	
43	A 1 f6	N-17°-E	楕円形	0.84 × 0.76	12	平坦	縦斜	人為		
44	A 1 e5	N-4°-E	[楕円形]	0.63 × 1.63	12	平坦	外堀 縦斜	人為		本跡 → SK 4・12
45	A 1 e6	N-10°-W	楕円形	0.96 × 0.85	25	皿状	外堀	人為	土師器	
46	A 1 e7	N-47°-E	楕円形	0.80 × 0.72	22	皿状	はは直立	自然		
47	A 1 e8	N-21°-W	隅丸長方形	0.66 × 0.60	52	有段	はは直立	人為		
48	A 1 f7	N-2°-W	楕円形	1.06 × 0.90	17	平坦	外堀 縦斜	人為		SD 1 → 本跡
49	A 1 f8	N-69°-E	楕円形	0.84 × 0.65	34	皿状	はは直立	人為		
50	A 1 e7	N-11°-W	[長方形]	0.62 × (0.40)	46	平坦	はは直立	人為		本跡 → SI 1

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第4・13図)

位置 調査区南部のA 1 e6～A 1 f7区、標高15mほどのほぼ平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号土坑を掘り込み、第48号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 A 1 f5区で調査区域外から北東方向(N-44°-E)へ直線的に延び、A 1 e6区で南東方向(N-134°-E)へ屈曲し、さらに北東方向へ屈曲したところで第48号土坑に掘り込まれて止まっている。確認できた長さは9.1mで軌道の変更を含めた全体的上幅は26～68cm、下幅8～36cmである。深さは8～26cmである。断面はU字状で、壁は直立しているが、A 1 f7区では緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックや炭化粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1点(礎)が出土しているが、混入したものと考えられる。

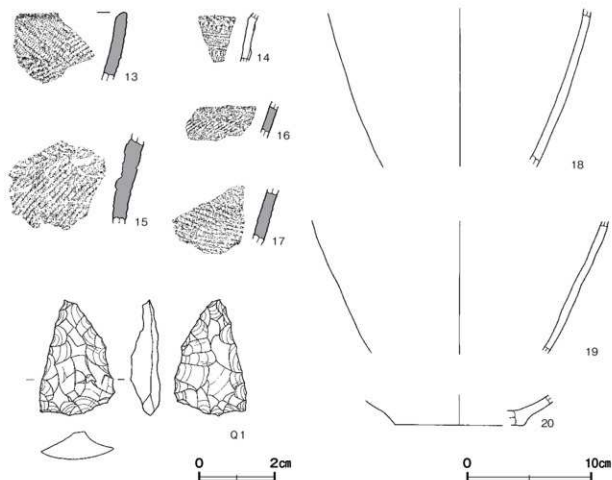
所見 時期及び性格は、伴う遺物が出土していないため不明である。



第13図 第1号溝跡実測図

(3) 遺構外出土遺物 (第14図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については、実測図と遺物観察表を掲載する。



第14図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
13	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・織羅	橙	普通	0段多条縄文L (横) と太さの違う0段多条縄文のLR (横) による羽状構成、内面横方向の磨き	表土	PL. 3
14	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい焼	普通	横位の2列の爪型文	表土	PL. 3
15	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・織羅	にぶい青黒	普通	無筋縄文L (横)	表土	PL. 3
16	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・織羅	にぶい青黒	普通	無筋縄文L (横)	表土	PL. 3
17	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・織羅	焼戻	普通	無筋縄文L (横)	表土	PL. 3
18	土師器	甕	-	(12.5)	-	長石・石英	明赤褐	普通	外・内面ナデ	SK. 2	5%
19	土師器	甕	-	(10.5)	-	長石・石英	明赤褐	普通	外・内面ナデ	SK. 2	5%
20	土師器	甕	-	(2.4)	(100)	長石・石英	明赤褐	普通	外・内面ナデ	表土	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	器 (土製品)	3.1	1.9	0.8	3.38	チャート	両面押圧潤磨	表土	PL. 3

第4節 ま と め

調査の結果、縄文時代の陥し穴1基、土坑5基、奈良時代の竪穴建物跡1棟、時期不明の土坑43基、溝跡1条を確認した。ここでは、各時代の様相や遺構の性格について概観することでまとめたい。

1 縄文時代

縄文時代の遺構は、陥し穴1基と土坑5基が確認でき、出土土器から、時期は前期である。確認した陥し穴は、北西部に張り出した平場を有しており、掘削作業時または狩猟時に使用された平場の可能性がある。

今回の調査では竪穴建物跡は確認されなかったが、立川を挟んで南東に位置する然山西遺跡からは同時期の竪穴建物跡が37棟確認されている¹⁾。また、立川左岸沿いの塚越南遺跡、塚越西遺跡、塚越東遺跡、小城北遺跡などからも前期の土器が多く採集されており²⁾、立川沿岸に縄文時代前期の集落が存在していたということが推測できる。

当該期、周辺には集落が広がり、当地は狩猟の場として利用されていたと考えられる。

2 奈良時代

竪穴建物跡が1棟確認された。今回確認された竪穴建物跡は竈が北隅に付設されており、時期は出土土器から8世紀後葉と考えられる。県内においては、8・9世紀の竪穴建物の竈は北壁の中央部に付設されることが多く、10世紀になると東壁の中央部に付設されるというのが一般的であり³⁾、壁隅に竈が付設されることは特異な形態である。当財団の『研究ノート』9号⁴⁾と、『埋蔵文化財年報34』⁵⁾によると、県内における竈は古墳時代後期に出現し、8世紀後葉以降に検出例が増加するという傾向が得られており、当遺跡の周辺では、立川左岸の然山西遺跡⁶⁾、江川左岸の宮内遺跡⁷⁾と馬立原遺跡⁸⁾において1棟ずつ竈の例が報告されている。然山西遺跡は当遺跡の竪穴建物跡と同様に北隅に竈が付設されており、時期は9世紀代と若干の時期差は認められるものの、形状が類似している。宮内遺跡と馬立原遺跡から確認された竪穴建物跡では、北東隅に竈が付設されており、時期は8世紀後葉で、今回確認された竪穴建物跡と同じ時期である。また、これらの遺跡の集落跡から1棟ずつ壁隅の竪穴建物跡が確認されていることから、当遺跡においても、集落の中に存在する1棟であるということが推測され、当該期には、周辺に集落が営まれていた可能性がある。出土遺物としては、土師器坏、須恵器小形短頸壺などがあり、土師器の坏には油煙が付着しており、灯明具として利用されていたと考えられる。灯明具として使用されたと考えられる坏を仏教関連の遺物として捉える例⁹⁾や、隅の竪穴建物跡が仏教関連の遺構である可能性を挙げる例¹⁰⁾もある。今回出土した遺物からは明確に仏教に関連した遺構であるということは言えないため、遺構の性格を考える上で、可能性にとどめておきたい。

註

- 1) 小川貴行 田村雅樹 佐藤一也 「然山西遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第379集 2013年3月
- 2) 岩井市史編さん委員会『岩井市史(考古編)』岩井市 1999年3月
- 3) 木村光輝 駒澤悦郎 中泉雄太 長洲正博 「茨城県内における壁隅の竪穴建物跡について - 特異な竈を付設した竪穴建物跡の分析 (1) - 」『埋蔵文化財年報34』茨城県教育財団 2015年6月

- 4) 仙波亨「コーナーに竈をもつ住居跡について」『研究ノート』9号 茨城県教育財団 2000年6月
- 5) 註3に同じ
- 6) 註1に同じ
- 7) 小林和彦 宮崎剛「宮内遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第359集 2012年3月
- 8) 中泉雄太「馬立原遺跡 馬立原西遺跡 国道354号岩井バイパス事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第402集 2015年3月
- 9) 小林健太郎「篠崎A遺跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第217集 2004年3月のなかで、撤去竈を含む型穴建物跡6棟から出土した治煙が付着した坏に着目し、寺院に付属する専従集団の可能性を示している。
- 10) 註3に同じ

第4章 鐘 打 東 遺 跡

第1節 調査の概要

鐘打東遺跡は、坂東市の北東部に位置し、江川と飯沼川の支流である立川に挟まれた標高14～18mほどの台地縁辺部に立地している。調査面積は2221㎡で、今回の調査範囲から北側へ遺跡が広がっていくと考えられる。調査前の現況は山林及び畑地である。

調査の結果、隔し穴1基（縄文時代）、土坑61基（時期不明）、溝跡5条（時期不明）を確認した。

遺物は、取納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏）、土師質土器（焙烙）、石器（鎌）などである。

第2節 基本層序

調査区東部の台地上の平坦面（B3g6区）にテストピットを設定し、基本土層（第15図）の観察を行った。

第1層は暗褐色を呈する表土層で、層厚は18～23cmである。

第2層はにぶい黄褐色を呈するローム層への漸移層である。ロームブロックを中量含んでおり、粘性・締まりはともに普通で、層厚は25～30cmである。

第3層は褐色を呈するソフトローム層である。粘性は普通で締まりは強く、層厚は30～45cmである。

第4層は褐色を呈するハードローム層への漸移層である。白色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに普通で、層厚は10～25cmである。

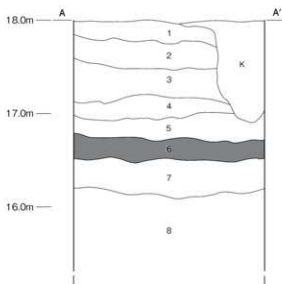
第5層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりはともに普通で、層厚は18～30cmである。

第6層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに普通で、層厚は18～28cmである。第2黒色帯である。

第7層は褐色を呈するハードローム層である。黄色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は30～40cmである。

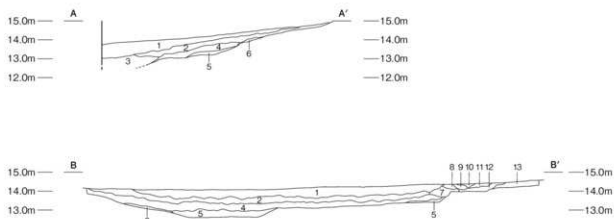
第8層は褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で締まりは強い。層厚は90cmまで確認したが、下層が未掘のため層厚は不明である。

なお、遺構は第2層上面で確認した。

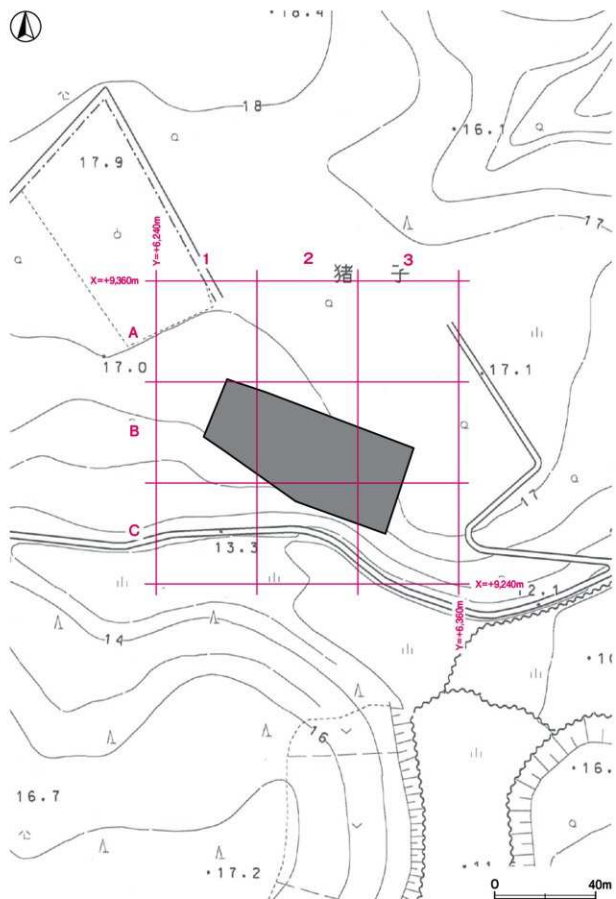


第15図 基本土層図

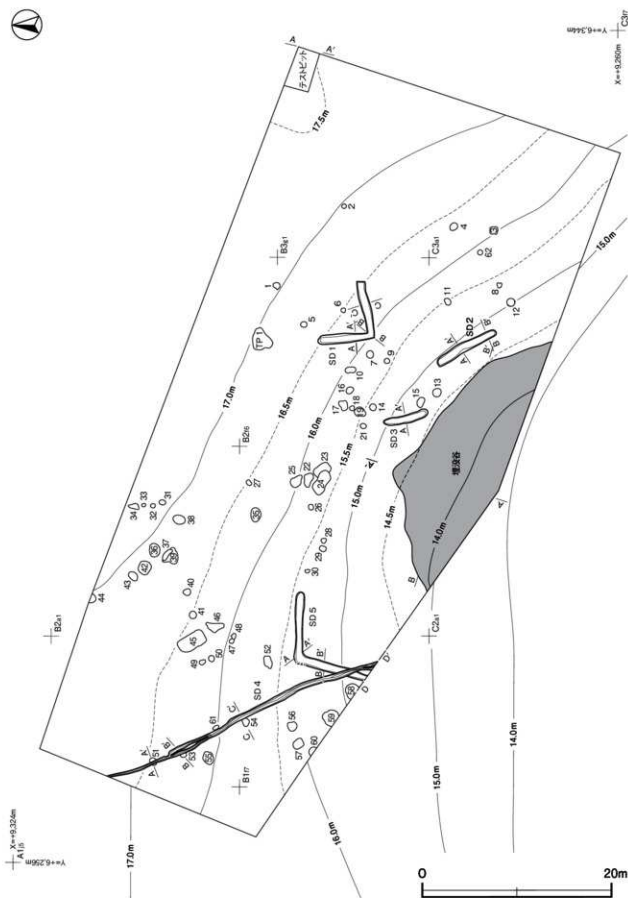
調査区南部のB2j5区から南側には、埋没谷が形成されている。埋没谷の範囲は東西26m、南北17mで、さらに調査区の南側へ延びている。堆積状況を確認したところ第1～3層まではロームブロック・粒子を微量に含む黒褐色土で、第4～6層はロームブロック・粒子を少量に含む暗褐色土である。第7～12層はローム粒子と炭化粒子を少量に含む黒褐色土で、第13層はロームブロックを少量に含むにぶい黄褐色土であった。なお、埋没谷堆積土の層中及びび下から遺構は確認されなかったが、縄文土器片、土師器片、剥片が出土している。



第16図 埋没谷土層図



第17図 鐘打東道路調査区設定図（坂東市都市計画図 2500分の1）



第18図 鐘打東遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴1基を確認した。以下、遺構について記述する。

陥し穴

第1号陥し穴（第19図 PL4）

位置 調査区中央部のB2f8区、標高17mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長径2.28m、短径2.01mの不整楕円形で、長径方向はN-41°-Eである。北西側の一部が半円形に張り出している。深さは138～154cmで、壁はほぼ直立している。

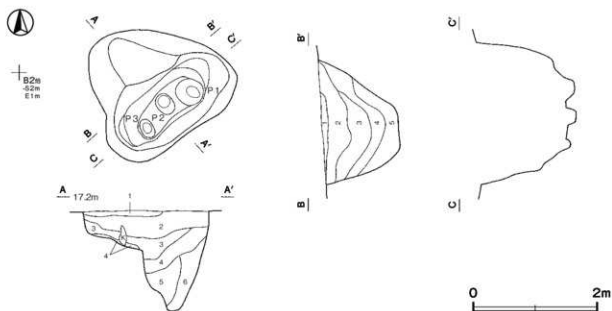
ビット 3か所。P1～P3は径32～40cm、深さ8～35cmで、遺茂木が立てられていた痕跡の可能性がある。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	4 暗褐色	ロームブロック中量
2 黒褐色	ロームブロック中量	5 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック少量	6 黒褐色	ロームブロック多量

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第19図 第1号陥し穴実測図

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない土坑61基と溝跡5条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

土坑 61 基については、遺構全体図（第 18 図）と一覧表を掲載する。

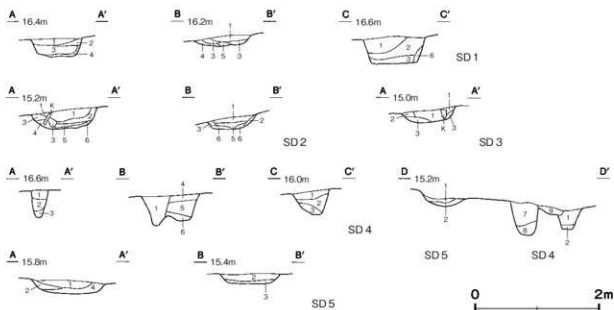
表 4 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 規		傾 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 2 f0	N-34°-E	不定形	0.70 × 0.68	20	外傾	皿状	人為	縄文土器	
2	B 3 h2	-	円形	0.58 × 0.58	70	直立	平皿 （土上）	人為		
3	C 3 b1	N-83°-E	不定形	1.04 × 0.93	53	直立	平皿	人為	縄文土器	
4	C 3 a1	N-24°-W	楕円形	0.93 × 0.76	54	直立	皿状	人為		
5	B 2 g9	N-3°-W	楕円形	0.60 × 0.55	30	直立	平皿	人為		
6	B 2 h9	-	円形	0.44 × 0.44	18	外傾	皿状	自然		
7	B 2 i8	N-90°-E	楕円形	0.85 × 0.72	22	外傾	平皿	自然		
8	C 2 b0	-	円形	0.60 × 0.58	28	外傾	皿状	人為		
9	B 2 i8	-	円形	0.72 × 0.66	30	緩斜	皿状	人為		
10	B 2 b8	N-3°-W	楕円形	1.20 × 0.64	28	外傾	皿状	自然		
11	C 1 a9	N-63°-E	楕円形	0.72 × 0.58	30	外傾	平皿	自然	縄文土器	
12	C 2 e9	N-24°-W	楕円形	0.95 × 0.86	28	外傾	平皿	自然		
13	C 2 a7	-	円形	0.90 × 0.90	34	外傾	平皿	自然		
14	B 2 i7	N-76°-W	楕円形	0.80 × 0.64	30	外傾	皿状	自然		
15	B 2 j7	N-62°-W	楕円形	1.20 × 0.73	27	外傾	平皿	自然		
16	B 2 b7	N-44°-W	楕円形	0.78 × 0.65	20	外傾	皿状	自然		
17	B 2 b7	N-27°-E	不定形	1.08 × 1.06	12	緩斜	平皿	人為	縄文土器	
18	B 2 b7	N-38°-E	不定形	0.54 × 0.46	10	外傾	平皿	人為		
19	B 2 i6	N-16°-E	楕円形	1.36 × 1.00	10	外傾	平皿	人為		
21	B 2 i6	N-7°-E	楕円形	0.70 × 0.60	18	外傾	平皿	人為		
22	B 2 g5	N-69°-W	不定形	1.48 × 0.98	68	外傾	平皿 （土上）	人為		
23	B 2 h5	N-34°-W	隅丸長方形	1.85 × 1.22	18	緩斜	平皿	自然	縄文土器、土師器	本跡→SK24
24	B 2 h5	N-61°-W	楕円形	2.62 × 1.34	16	緩斜	平皿	自然		SK23→本跡
25	B 2 g5	N-46°-W	楕円形	1.60 × 1.10	24	外傾	皿状	自然		
26	B 2 g4	N-72°-E	楕円形	0.71 × 0.60	18	直立 外傾	平皿	人為	縄文土器	
27	B 2 f5	N-52°-E	楕円形	0.54 × 0.46	16	外傾	平皿	人為		
28	B 2 h3	N-76°-W	楕円形	0.68 × 0.58	34	外傾	皿状	自然		
29	B 2 h3	N-11°-E	隅丸長方形	0.70 × 0.51	25	外傾	平皿	人為		
30	B 2 g2	N-32°-W	楕円形	0.50 × 0.40	16	外傾	平皿	自然		
31	B 2 e4	-	円形	0.62 × 0.60	18	外傾	皿状	人為	縄文土器	
32	B 2 e4	N-33°-W	楕円形	0.56 × 0.46	18	外傾	平皿	人為	縄文土器	
33	B 2 e4	-	円形	0.44 × 0.41	14	外傾	皿状	自然	縄文土器	
34	B 2 e4	N-25°-E	楕円形	1.20 × 0.72	25	外傾	皿状	人為	縄文土器	
35	B 2 f4	-	円形	1.13 × 1.10	32	外傾	平皿	人為		
36	B 2 e3	N-76°-W	楕円形	1.39 × 1.03	18	外傾	平皿	人為		
37	B 2 d3	N-46°-W	楕円形	1.60 × 0.54	24	外傾	平皿	自然	縄文土器	SK30→本跡
38	B 2 d4	N-19°-E	楕円形	1.27 × 0.97	46	外傾	皿状	人為 自然	土師器	
39	B 2 d3	N-38°-W	不定形	1.86 × 1.64	40	外傾	平皿	人為	土師器	本跡→SK37
40	B 2 d2	-	円形	0.80 × 0.80	34	直立	平皿	人為		
41	B 2 d1	N-68°-W	楕円形	0.70 × 0.65	28	直立 外傾	平皿	人為	土師器	

番号	位置	長尺方向	平面形	規		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
42	B 2 c2	N-65°-E	楕円形	1.60 × 1.32	38	外傾	皿状	入為	土師器	
43	B 2 c2	N-37°-E	楕円形	1.08 × 0.80	27	外傾	皿状	自然	土師器	
44	B 2 b2	-	【円形】	0.90 × (0.65)	34	外傾	皿状	入為		
45	B 1 d5	N-23°-W	長方形	2.95 × 1.47	45	外傾	平坦	入為	土師器	
46	B 2 e1	N-8°-E	楕円形	2.22 × 1.03	85	直立 縦斜	平坦	自然		
47	B 1 a0	N-61°-W	楕円形	(0.45) × 0.40	67	直立 外傾	平坦 ビツト1	入為		本跡→SK48
48	B 1 a0	N-62°-W	楕円形	0.70 × 0.54	88	外傾	平坦	入為	土師器	SK47→本跡
49	B 1 a0	N-34°-W	楕円形	0.58 × 0.45	69	外傾	平坦 ビツト1	入為		
50	B 1 a0	-	円形	0.70 × 0.67	22	直立	平坦	入為		
51	B 1 c7	-	円形	0.76 × 0.70	26	外傾	皿状	入為	縄文土器	本跡→SD 4
52	B 1 f0	N-66°-E	楕円形	1.42 × 0.84	48	直立	平坦	入為		
53	B 1 d7	-	【円形・楕円形】	(0.86) × (0.50)	18	縦斜	皿状	入為		本跡→SD 4
54	B 1 f8	N-73°-E	楕円形	(0.98) × 0.71	38	外傾	皿状	入為		本跡→SD 4
55	B 1 e7	N-62°-E	楕円形	1.60 × 1.24	100	直立	平坦	自然	縄文土器	
56	B 1 g8	N-51°-E	楕円形	1.14 × 1.02	70	外傾	平坦 ビツト1	自然		
57	B 1 g8	N-44°-W	隅丸長方形	1.32 × 0.86	37	外傾	平坦	入為	土師器	
58	B 1 f9	N-43°-E	【楕円形】	(1.34) × 1.58	72	直立	平坦	入為		
59	B 1 f8	N-32°-E	【楕円形】	(1.54) × 1.72	68	外傾	平坦	入為		
60	B 1 c7	-	【円形】	(0.88) × (0.52)	32	外傾	平坦	自然		
61	B 1 e8	N-26°-W	楕円形	0.76 × (0.40)	31	外傾	皿状	入為		本跡→SD 4
62	C 3 b1	N-34°-W	楕円形	0.62 × 0.50	13	縦斜	皿状	入為		

(2) 溝跡

溝跡5条を確認した。以下、土層解説と断面図(第20図)、一覽表を掲載し、平面図については遺構全体図(第18図)に示す。



第20図 その他の溝跡実測図

第1号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒色 炭化粒子中量、焼土粒子微量
- 4 に近い黄褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子微量

第2号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 に近い黄褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子微量
- 5 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量
- 6 に近い黄褐色 ローム粒子中量

第3号溝跡土層解説

- 1 黒色 炭化物中量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 に近い黄褐色 ロームブロック少量

第4号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 に近い黄褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ロームブロック微量
- 7 黒褐色 ローム粒子微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量
- 9 黒褐色 ローム粒子少量

第5号溝跡土層解説

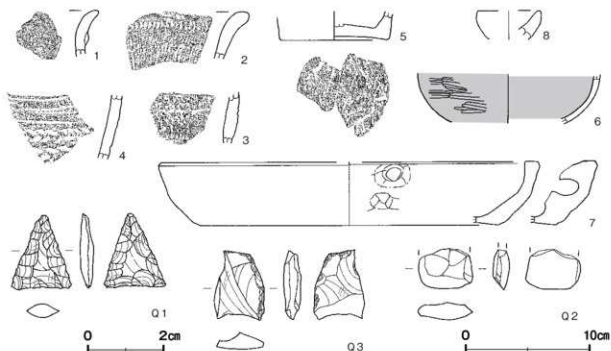
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量

表5 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模			断面	階面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)					
1	B21a8~B21d	N-5°-W N-28°-E	L字状	11.4	68~101	48~72	14~42	逆台形 L字状	外傾	人瓦	
2	C2a8~C21d9	N-27°-W	直線状	7.0	80~102	54~75	17~28	逆台形	外傾	自然	
3	B21e~B21f	N-8°-W	直線状	4.8	78~90	56~68	20	逆台形 山形 L字状	人瓦	縄文土器	
4	B1b7~B11d	N-23°-W	直線状	30.8	22~94	6~26	37~52	逆台形 L字状	外傾	人瓦	SKSI・53・54・ 61、SD 5→本跡
5	B21g~B11d	N-17°-E N-92°-E	L字状	14.4	67~97	42~74	7~20	逆台形	紙斜	自然	縄文土器、土師器 本跡→SD 4

(3) 遺構外出土遺物 (第21図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については実測図と観察表を掲載する。



第21図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第 21 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部隆帯あり	表土	PL 5
2	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部半軌竹管による爪型文	表土	PL 5
3	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	沈線文 貝殻復線文	表土	PL 5
4	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	沈線文 半軌竹管による押引き文	表土	PL 5
5	縄文土器	深鉢	-	(23)	[68]	長石・石英・赤色粘土	にぶい赤褐色	普通	底部刷り痕	埋没谷	10%
6	土師器	杯	-	(39)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	明赤褐色	普通	外・内面赤彩 外面磨き	表土	5%
7	土師器土器	始筒	[300]	50	[23.8]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	内耳部分欠損	表土	5% PL 5
8	土師器土器	ニナット	[4.8]	(23)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい赤褐色	普通	口縁部ナゲ	表土	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	皿	20	1.6	0.4	0.90	チャート	平蓋無蓋縁 両面押圧調整	表土	PL 5
Q2	磨製石斧	(3.2)	4.3	1.3	(24.09)	粘板岩	基部欠損	表土	PL 5
Q3	二次調整器片	5.5	4.0	1.4	24.28	頁岩	右側縁部と背面上部、左側縁部に割離痕を有する	埋没谷	PL 5

第4節 ま と め

今回の調査で、縄文時代の陥し穴 1 基、時期不明の土坑 61 基、溝跡 5 条、埋没谷 1 か所を確認した。

縄文時代の陥し穴は、3 か所のピットを有しており、逆茂木が立てられていた可能性がある。また、北西部に平場を有しており、掘削作業時または狩猟時に使用された平場である可能性がある。前章で述べた埃倉遺跡で確認された陥し穴も張り出した平場を有しており、また、立川左岸に所在する然山西遺跡¹⁾でも貼り出し部はないが同様に平場を有する陥し穴が確認されている。こうした形状は、当地域周辺の特徴であると考えられる。当該期は周辺も含め、狩猟の場として利用されていたと推測できる。

また、調査区域内からは遺構は確認できなかったが、縄文時代前期（黒浜式・浮島式・諸磯式）の土器片が多数出土している。縄文時代早期から前期にかけては縄文海進が最盛期となり、内陸部まで海水が入りこみ、内海が形成されていた。当遺跡周辺に所在する然山西遺跡からは、縄文時代前期の地点貝塚が 3 か所確認されており²⁾、汽水域で採集できるヤマトシジミが出土している。そのほかにも立川左岸沿いに所在している塚越南遺跡、塚越西遺跡、塚越東遺跡からも同時期である縄文時代前期の土器と共にヤマトシジミやハマグリ、アサリ、カキなどの貝が多く採集されている³⁾。これらのことから、当時は当遺跡の周辺にも内海が広がり、豊かな自然環境のもとに、人々が生活していたと考えられる。

註

- 1) 小川貴行 田村雅博 佐藤一也「然山西遺跡 一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 379 集 2013 年 3 月 第 1 号陥し穴は楕円形の南壁に平場を有している。
- 2) 註 1 と同じ。
- 3) 岩井市史編さん委員会『岩井市史 (考古編)』岩井市 1999 年 3 月では、発掘調査はされていないが、周辺では土器片とともに多くの貝類が採集されている。

第5章 埃倉西遺跡

第1節 調査の概要

埃倉西遺跡は、坂東市の北東部に位置し、江川と飯沼川の支流である立川に挟まれた標高13～17mほどの台地縁辺部に立地している。調査面積は2,797㎡で、遺跡の範囲は南側へ広がっていきと考えられる。調査前の現況は山林及び畑地である。

調査の結果、堅穴建物跡1棟（縄文時代）、土坑29基（縄文時代6・時期不明23）、溝跡1条（時期不明）を確認した。

遺物は、収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、土製品（乳棒状土製品）、石器（鎌・敲石）などである。

第2節 基本層序

調査区南東部の台地上の平坦部（B27区）にテストピット1を、調査区西部の平坦部（B1b3区）にテストピット2を設定し、基本土層（第22図）の観察を行った。

第1層は暗褐色を呈する表土層で、ロームブロックを中量と炭化粒子を微量に含んでいる。粘性・締まりはともに弱く、層厚は40～70cmである。

第2層はにぶい黄褐色を呈するソフトローム層で赤色粒子を少量含んでいる。粘性・締まりはともに普通で、層厚は5～25cmである。

第3層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を微量に含んでおり、粘性・締まりは共に強く、層厚は10～30cmである。

第4層は暗褐色を呈する第2黒色帯である。赤色粒子・白色粒子を微量に含んでおり、粘性・締まりはともに強く、層厚は15～30cmである。

第5層は褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は5～15cmである。

第6層はにぶい黄褐色を呈するハードローム層である。白色粒子と砂粒を微量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は10～25cmである。

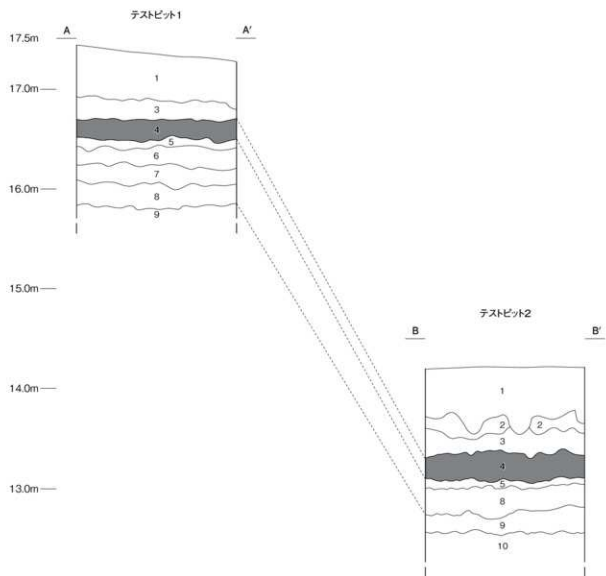
第7層は褐色を呈するハードローム層である。砂粒を少量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は15～25cmである。

第8層は褐色を呈するハードローム層である。白色粒子と赤色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに強く、層厚は20～35cmである。

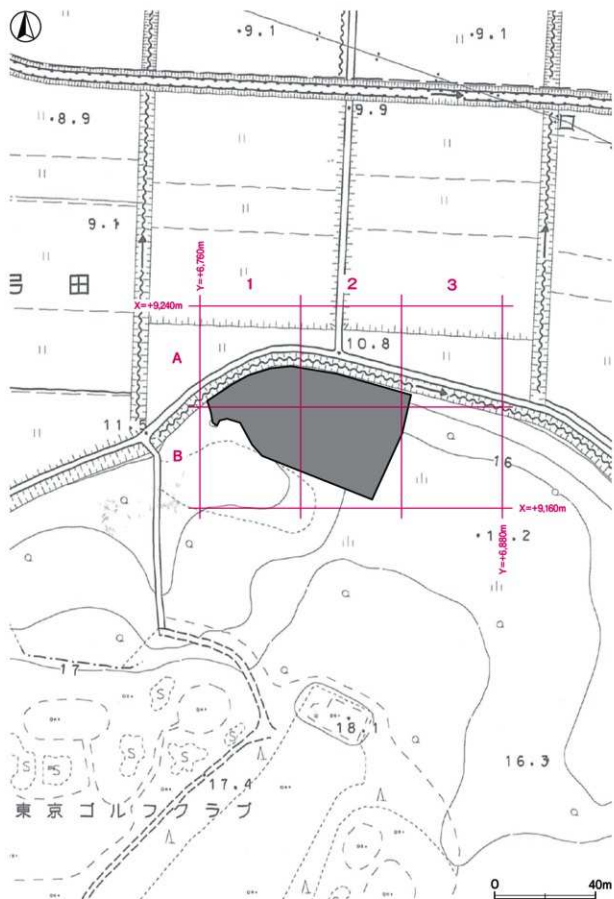
第9層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりはともに強く、層厚は15～30cmである。

第10層は灰褐色を呈する常態粘土層への漸移層である。白色粒子・赤色粒子を微量に含み、粘性・締まりはともに強い。層厚は30cmまで確認したが、下層が未掘のため層厚は不明である。

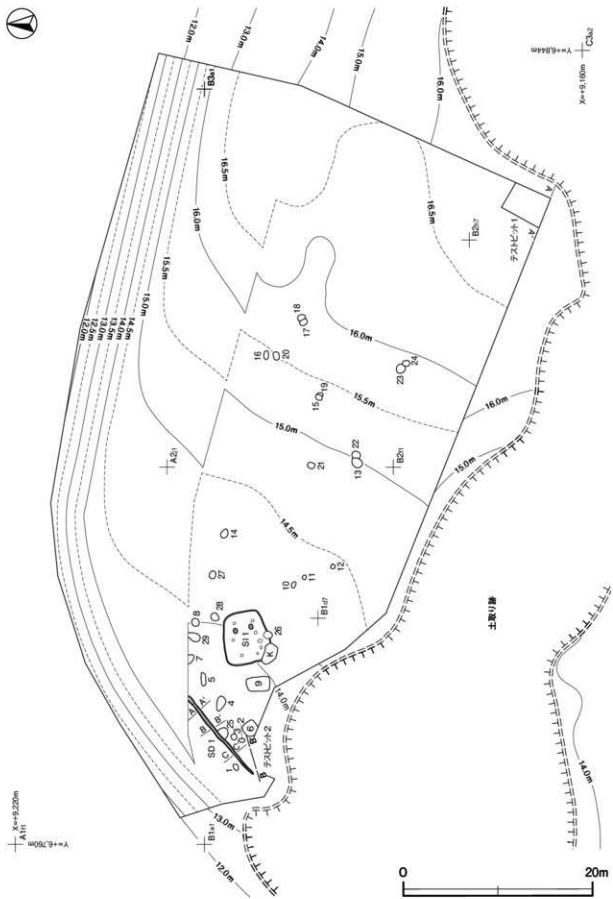
なお、遺構は第3層上面で確認した。



第 22 図 基本土層図



第23図 埃倉西遺跡調査区設定図（坂東市都市計画図2,500分の1）



第 24 図 埃倉西遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1棟、土坑6基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第25・26図 PL 6・7）

位置 調査区北西部のB1b6区、標高14mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.52m、短軸4.88mの長方形で、主軸方向はN-80°-Eである。壁は高さ30～42cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は平坦に掘りくぼめた部分にロームブロックを含む第14・15層を埋土として構築されている。

炉 2か所。北東部に炉1と南東部に炉2が付設されている。炉1は長径60cm、短径46cmの楕円形で、床面を8cm掘りくぼめた地床炉である。第2層上面が炉床面で、火熱を受けて赤変硬化している。炉2は長径60cm、短径48cmの楕円形で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。第2層上面が炉床面で、火熱を受けて赤変硬化している。

炉1土層解説

- 1 に近い褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

炉2土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量
- 2 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
- 3 に近い黄褐色 ロームブロック多量

ピット 8か所。P1～P6は深さ30～45cmで、形状と配置から主柱穴と考えられる。P7は深さ30cm、P8は深さ20cmで、配置から補助柱穴と考えられる。

P1～P6土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

P7・P8土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

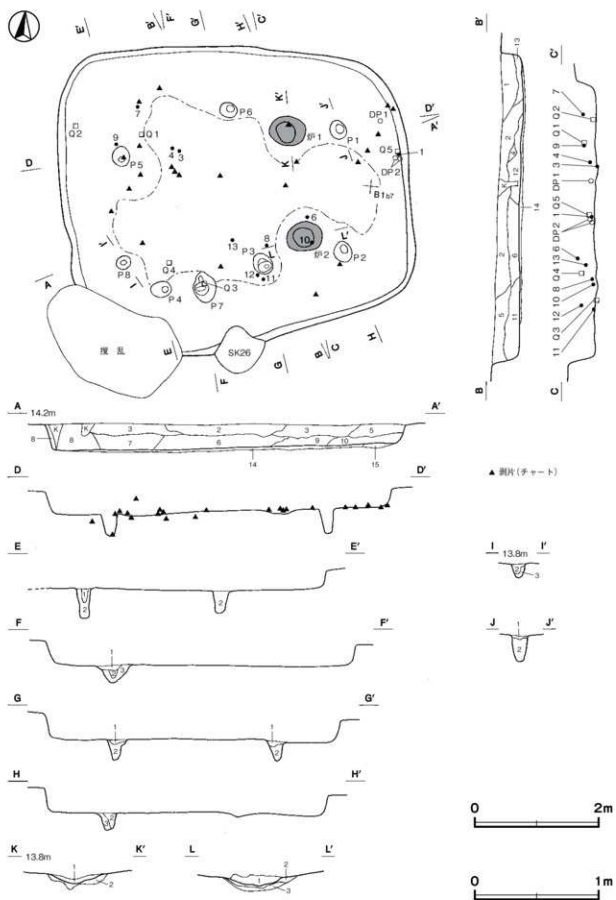
覆土 13層に分層できる。暗褐色・黒褐色の焼土粒子、炭化粒子、ロームブロックを含む層がブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。第14・15層は貼床の構築土である。

土層解説

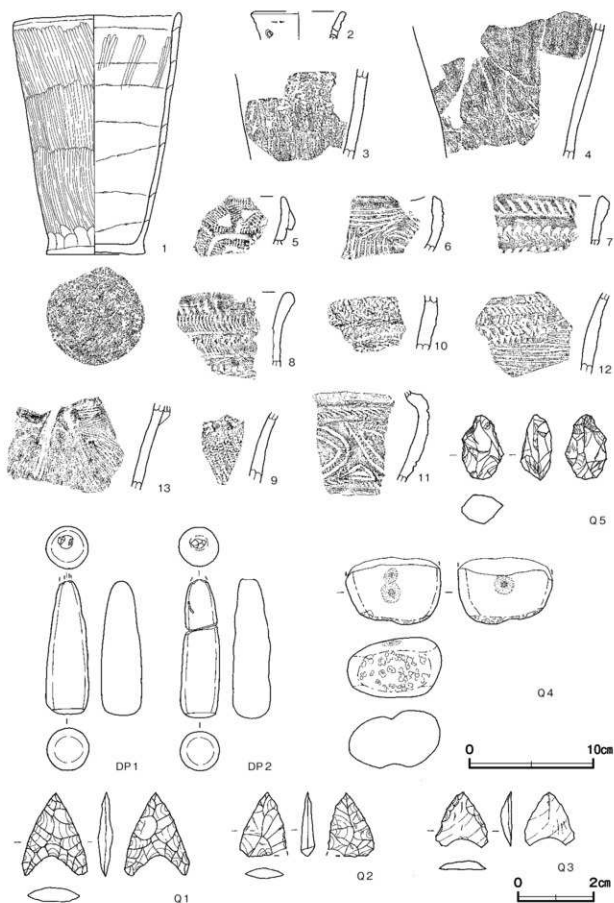
- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1 褐色 ロームブロック中量 | 9 褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 10 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 11 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 12 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック微量 |
| 5 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 13 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化材微量 | 14 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 15 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 8 暗褐色 ローム粒子少量 | |

遺物出土状況 縄文土器片67点（深鉢）、乳棒状の土製品2点、石器4点（鎌3、敲石1）、石核1点、剥片23点が出土している。1は東壁際の中央部から、斜位で壁に立てかけられたような状態で出土しており、DP1・DP2は北東部の床面から出土している。いずれも廃絶時に遺棄されたものと考えられる。床面近くからはチャート製の石鎌や、大きさ0.5～3cmの剥片が出土しており、石器製作を行っていたことが推測される。第25図中の▲は全てチャートの剥片である。

所見 時期は、出土土器から前期後葉と考えられる。



第25図 第1号竪穴建物跡実測図



第 26 图 第 1 号竖穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表(第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	132	191	78	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	下部に指面圧痕 外・内面磨き	覆土下層	80% PL.9
2	縄文土器	深鉢	[70]	(22)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	穿孔あり	覆土中層	5%
3	縄文土器	深鉢	-	(72)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	外面磨き→貝殻流状文	覆土下層	5%
4	縄文土器	深鉢	-	(107)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	外・内面磨き	覆土下層	10%
5	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	三角形印刻文 全体に貝殻微細圧痕 沈線	覆土中層	PL.8
6	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい赤橙	普通	流状口縁 沈線文	覆土上層	PL.8
7	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部に斜位の筋み目 変形爪型文	覆土中層	PL.8
8	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	褐	普通	口縁部に刺突文 貝殻流状文 沈線文	覆土下層	PL.8
9	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	工具による刺突文 貝殻流状文	覆土中層	
10	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	赤橙	普通	横位・縦位の浮線文	覆土下層	
11	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	キヤリバー型口縁 口唇部に斜位の筋み目 木蓋文	覆土下層	PL.8
12	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰褐	普通	手載竹管による刺突文と沈線文 変形爪型文	覆土中層	
13	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	流状口縁 外面の隆帯が欠損 側面に手載竹管 による沈線文	覆土中層	PL.8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	皿	22	17	04	091	チャート	円基無基縁 両面押圧割縁	覆土上層	PL.9
Q2	皿	17	12	04	(075)	チャート	円基無基縁 両面押圧割縁	覆土下層	PL.9
Q3	皿	14	14	03	048	チャート	円基無基縁 片面押圧割縁	覆土上層	PL.9
Q4	磁石	(5.2)	(7.6)	48	(2623)	安山岩	下部部に敲打痕 表裏面に凹み	覆土中層	PL.9
Q5	石核	5.2	3.3	2.5	30.1	チャート	楕円から上部に平たくして割縁痕を有する 背面に下部を打点として割縁痕を有する	覆土下層	

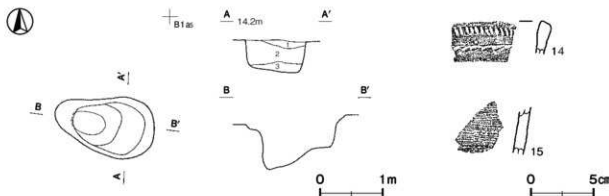
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP1	乳形状土器品	(106)	3.4	3.3	(1195)	長石・石英	にぶい褐	底面磨痕 上部欠損部分あり	床面	PL.9 部付着
DP2	乳形状土器品	(109)	3.2	3.1	(1100)	長石・石英・赤色 粘土・黒色粘土	にぶい黄橙	底面磨痕 上部欠損部分あり	床面	PL.9

(2) 土坑

第4号土坑(第27図)

位置 調査区北西部のB1a4区、標高14mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.62m、短径0.98mの楕円形で、長径方向はN-77°-Wである。深さは74cmで、底面は皿状である。北西部が一段低くなり、壁は北西壁が内彎している以外は直立している。



第27図 第4号土坑・出土遺物実測図

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 におい黄褐色 ロームブロック少量 3 におい黄褐色 ロームブロック中量
2 灰黄褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片11点(深鉢)が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期後葉と考えられる。

第4号土坑出土遺物観察表(第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
14	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰褐色	普通	口唇部に刻み目	覆土中	
15	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	におい赤褐色	普通	平軌竹管による沈線文	覆土中	

第6号土坑(第28図 PL7)

位置 調査区北西部のB1b4区、標高14mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が一部調査区域外に伸びているが、長径1.57m、短径1.54mの隅丸方形で長径方向はN-45°-Eである。深さは18cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

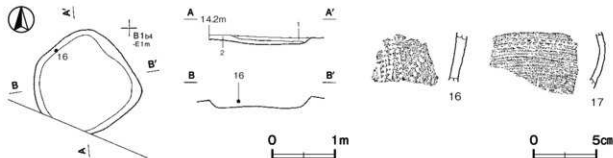
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片7点(深鉢6、浅鉢1)が覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期後葉と考えられる。



第28図 第6号土坑・出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
16	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	暗褐色	普通	口縁部縦圧痕	覆土上層	
17	縄文土器	浅鉢	-	-	-	長石・石英	暗褐色	普通	外面上部に赤粘土平軌竹管による刻線文、平軌竹管による横位の沈線文	覆土中	PL.8

第7号土坑(第29図)

位置 調査区北西部のA1j5区、標高14mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東西径は0.84 mで、北部が削平されているため、南北径は0.70 mしか確認できなかった。楕円形と推測され、南北径方向はN-23°-Wである。深さは34cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

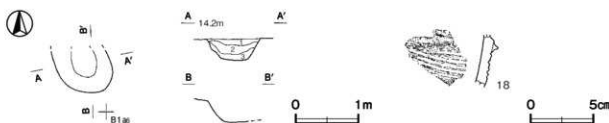
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量
2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片12点（深鉢）が覆土中層から上層にかけて出土している。

所見 時期は、出土土器から前期後葉と考えられる。



第29図 第7号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表（第29図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の種類はか	出土位置	備考
18	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・礫	にがい赤褐色	普通	沈線文 断面三角形の隆帯短付	覆土中	

第8号土坑（第30図）

位置 調査区北西部のA1j6区、標高14 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.86 m、短径0.77 mの楕円形で、長径方向はN-66°-Eである。深さは78cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

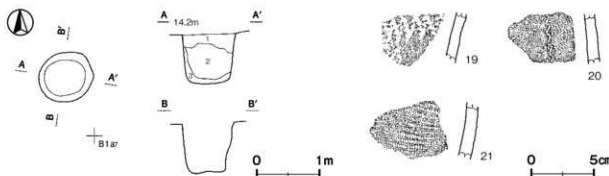
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片30点（深鉢）が覆土中から出土している。

所見 時期は出土土器から前期後葉と考えられる。



第30図 第8号土坑・出土遺物実測図

第8号土坑出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
19	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粒子	に灰い橙	普通	貝殻波状文	覆土中	
20	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粒子	灰黄褐色	普通	結節縄文第1種(細)	覆土中	
21	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	黄	普通	0段多葉縄文B.L.	覆土中	

第25号土坑 (第31図)

位置 調査区北西部のB1a3区、標高14mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東・南西径は1.04mで、北西部を第1号溝に掘り込まれているため、北西・南東径は0.92mしか確認できなかった。楕円形と推測され、北西・南東径方向はN-42°-Wである。深さは45cmで、底面は皿状であり、北東部がやや高くなっている。壁はほぼ直立している。

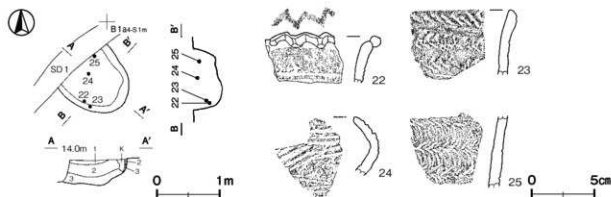
覆土 3層に分層できる。焼土粒子やロームブロックを含む層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 層 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 層 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
2 層 褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片28点(深鉢)が出土している。22～25は、覆土中層から上層にかけて出土している。

所見 時期は、出土土器から前期後葉と考えられる。



第31図 第25号土坑・出土遺物実測図

第25号土坑出土遺物観察表 (第31図)

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
22	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粒子	に灰い橙	普通	口唇部に縦溝状の隆起部付 上部に貝殻波状文	覆土中層	PL. 8
23	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粒子	に灰い橙	普通	口縁部に斜位の刷目目 変形爪形文	覆土中層	PL. 8
24	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・霞	に灰い橙	普通	沈線文 無節縄文L(横)	覆土上層	
25	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色 粒子	に灰い橙	普通	変形爪形文	覆土上層	

第26号土坑 (第32図 PL 7)

位置 調査区北西部のB1b6区、標高14mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 第1号堅穴建物跡の掘り込み後に確認したため、南北径0.93mと推測され、東西径0.82mしか確認できなかった。楕円形と推測され、南北方向はN-4°-Wである。深さは40cmで、底面は皿状である。壁は外傾している。

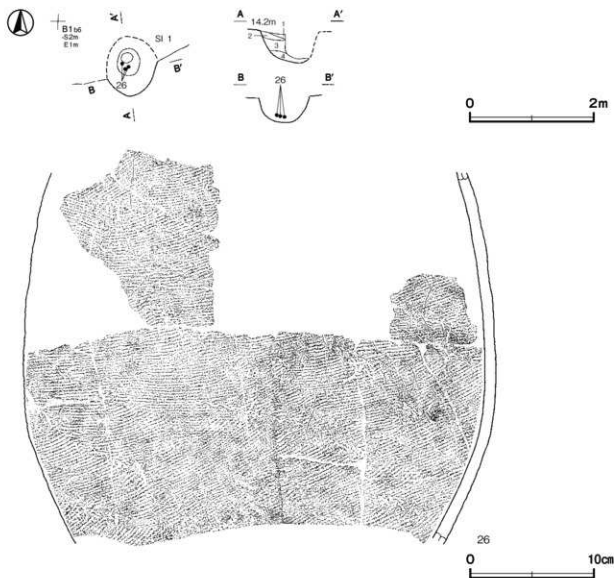
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|-----|---|-----------|-----|---|----------------|
| 1 層 | 色 | ロームブロック微量 | 3 層 | 色 | ロームブロック少量 |
| 2 層 | 色 | ロームブロック中量 | 4 層 | 色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）、剥片1点が、覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期末葉と考えられる。



第32図 第26号土坑・出土遺物実測図

第26号土坑出土遺物観察表（第32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	文様の特徴	ほか	出土位置	備考
26	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰白・石灰・黒母・炭化粒子	にぶい橙	普通	1段多葉縄文L段（横）	結節縄文1横（横）	覆土下層	20%

表6 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	方位(軸方向)	平面形	規模		構面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
4	B 1a4	N-77°-W	楕円形	1.62 × 0.98	74	直立内壁	皿状	人為	縄文土器	
6	B 1b4	N-45°-E	隅丸方形	1.57 × 1.54	18	外壁	平坦	人為	縄文土器	
7	A 1j5	N-23°-W	【楕円形】	(0.70) × 0.84	34	外壁	平坦	人為	縄文土器	
8	A 1j6	N-66°-E	楕円形	0.86 × 0.77	78	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器	
25	B 1a3	N-42°-W	【楕円形】	(0.92) × 1.04	45	ほぼ直立	皿状	人為	縄文土器	本跡→SD 1
26	B 1b6	N-4°-W	【楕円形】	(0.93) × (0.82)	40	外壁	皿状	人為	縄文土器、銅片	SI 1→本跡

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない土坑23基と溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

土坑23基については、遺構全体図(第24図)及び一覧表を掲載する。

表7 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		構面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	B 1a3	N-55°-E	楕円形	0.72 × 0.50	12	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
2	B 1a3	N-3°-E	楕円形	0.55 × 0.40	30	外壁	平坦	自然	縄文土器	
3	B 1a3	N-2°-W	楕円形	0.60 × 0.53	43	外壁	平坦	自然	縄文土器	
5	A 1j5	N-83°-E	楕円形	1.36 × 0.50	72	直立	有段	自然	縄文土器	
9	B 1b5	N-4°-W	隅丸長方形	2.60 × 1.50	34	外壁	平坦	人為	縄文土器	
10	B 1c7	N-70°-W	楕円形	0.61 × 0.36	13	外壁	平坦	自然	縄文土器	
11	B 1c8	-	円形	0.40 × 0.40	18	外壁	皿状	自然	縄文土器	
12	B 1d8	N-9°-W	楕円形	0.36 × 0.29	38	直立	皿状	人為		
13	B 2e1	N-28°-E	楕円形	1.23 × 1.00	40	直立	平坦	自然		SK22→本跡
14	B 1a9	N-69°-W	楕円形	0.83 × 0.56	18	外壁	平坦	自然	縄文土器	
15	B 2d2	N-34°-E	楕円形	0.78 × 0.56	43	外壁	平坦	自然		SK19→本跡
16	B 2b3	N-80°-E	楕円形	0.90 × 0.68	30	外壁	平坦	自然		
17	B 2e4	N-5°-E	楕円形	0.58 × 0.45	36	外壁	平坦	自然		
18	B 2e4	N-20°-W	楕円形	0.65 × 0.46	33	外壁	皿状	人為		
19	B 2d2	N-30°-W	【楕円形】	(0.34) × (0.30)	20	外壁	平坦	自然	縄文土器	本跡→SK15
20	B 2b3	N-66°-E	楕円形	0.90 × 0.62	28	外壁	皿状 ピット上	自然		
21	B 2c1	-	円形	0.70 × 0.70	22	外壁	平坦	自然		
22	B 2e1	N-23°-E	楕円形	0.93 × (0.54)	28	外壁	平坦	-		本跡→SK13
23	B 2f3	N-40°-W	楕円形	(0.88) × 0.86	80	直立	平坦	自然		本跡→SK24
24	B 2f3	N-40°-W	楕円形	0.80 × 0.54	76	直立	皿状	人為		SK23→本跡
27	B 1a8	N-71°-W	楕円形	0.90 × 0.62	16	外壁	平坦	自然	縄文土器、銅片	
28	B 1a7	N-39°-E	楕円形	0.93 × 0.80	28	外壁	平坦	自然	縄文土器、石核	
29	A 1j6	N-19°-E	楕円形	(1.30) × 0.80	56	直立	皿状	人為	縄文土器	

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第24・33図)

位置 調査区北西部のA1j4～B1b2区、標高14mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第25号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 A1j4～B1b2区から北東方向へ直線的に延び、調査区域外へ延びている。確認できた長さ
は10.5mで、上幅は18～43cm、下幅6～20cmである。深さは17～26cmである。断面は逆台形で、壁は直に
立ち上がっている。

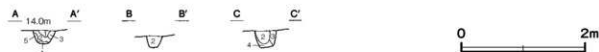
覆土 5層に分けられる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 褐色	ローム粒子少量	4 褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ロームブロック微量	5 褐色	ロームブロック中量
3 褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 縄文土器片17点(深鉢)、礫1点が出土しているが、混入したものと考えられる。

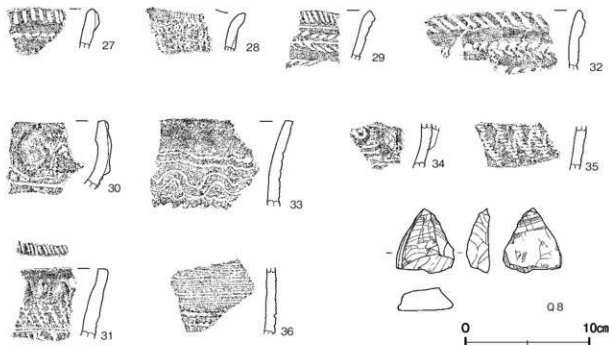
所見 時期及び性格は、伴う遺物が出土していないため不明である。



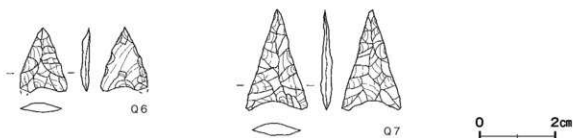
第33図 第1号溝跡実測図

(3) 遺構外出土遺物 (第34・35図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については実測図と観察表を掲載する。



第34図 遺構外出土遺物実測図(1)



第35図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第34・35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
27	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい粉	普通	口縁部胎付と斜位の刷み目 工具による刷突文	表土	
28	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい粉	普通	波状口縁の一部 口縁部刷み目 貝殻刷線圧痕	表土	PL 8
29	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい粉	普通	口唇部刷み目 沈線文 変形爪型文	表土	
30	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	貝殻刷線圧痕 工具による沈線 胎付による渦象文	表土	
31	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	澄	普通	口唇部刷み目 工具による刷突文 貝殻刷線圧痕 手載竹管による平行沈線文	表土	
32	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい粉	普通	口唇部斜位の刷み目 貝殻刷線文	表土	PL 8
33	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	澄	普通	手載竹管による大きさの異なる波状文	表土	PL 8
34	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子・燧	にぶい赤褐色	普通	手載竹管による横位の沈線文 ゴタン状の胎付	表土	PL 8
35	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい粉	普通	貝殻刷線文	表土	
36	縄文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子・燧	明赤褐色	普通	横位の沈線文	表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 6	鏃	1.7	1.3	0.2	(0.25)	チャート	四角無芽鏃 両面押圧調整	表土	PL 9
Q 7	鏃	2.7	1.6	0.3	0.86	チャート	四角無芽鏃 両面押圧調整	表土	PL 9
Q 8	石核	5.1	4.7	1.7	39.04	黒曜石	背面は下部の打点から平坦な面磨きをしている	表土	PL 9

第4節 ま と め

今回の調査で、縄文時代の竪穴建物跡1棟と、土坑6基、時期不明の土坑23基と溝跡1条を確認した。ここでは、縄文時代の遺構と遺物について概観し、若干の考察を加えることでまとめたい。

竪穴建物跡は、主柱穴が6か所の隅丸長方形で、炬が2か所確認されている。時期は、出土土器から前期後葉と考えられる。周辺の縄文時代前期の遺跡としては、立川を挟んで南東に然山西遺跡¹⁾が位置しており、同時期の竪穴建物跡37棟が確認されている。同時期の遺跡で竪穴建物跡が多く確認されていることから、当遺跡の周辺にも集落が形成されていたということが推測される。また、然山西遺跡の報告書では、竪穴建物跡を平面形及び主柱穴の数と配置からA～F群に分類しており²⁾、それによると今回確認された竪穴建物跡は、主柱穴が6か所で長方形に配され、平面形が隅丸方形または隅丸長方形で、炬が2か所または3か所あるという特徴を示すA群に属すると思われる。然山西遺跡においては、前期後葉の1棟に同じ形態のものが確認されており、今回確認された竪穴建物跡はそれに準じるものであると考えられる。

竪穴建物跡からの出土土器としては、深鉢の破片が多くみられ、1点のみはほぼ完形で東壁際中央から斜位で出土している。無文で、体部に丁寧な磨きが施されていた。そのほかに、土製品2点が床面から出土している。形状は乳棒状で、端部に擦痕が認められることから、乳棒のような用途が推測される。ただし、擦痕は長期的に使用されたと言えるほどは認められず、今回は形状から乳棒状土製品と呼称している。また、上部には欠損が2か所確認でき、紐を通すための穴があったと推測できる。類例が認められないため、明確な用途や機能は不明であり、今後の類例が待たれるところである。

また、床面からはチャート製の石鏝のほかに、製作時に散在したと思われる長さ0.5～3cmのチャートの小剥片が多数確認されている。剥片同士の接合はできなかったが、同一の石材であると推測されるものもあったため、おそらく竪穴建物内部で石器を製作していたと推測できる。

調査区内及び土坑からは前期の土器片が多く確認されており、竪穴建物跡からの出土土器と時期が同じものが多い。当時は第4章第4節で述べたように当遺跡の周辺まで内海が広がり、人々の活動の場として利用されていた景観が想像できる。

註

- 1) 小川貴行 田村雅樹 佐藤一也「然山西遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第379集 2013年3月
- 2) 註1に同じ

写 真 图 版

埃 倉 遺 跡
鐘 打 東 遺 跡
埃 倉 西 遺 跡



埃倉西遺跡出土遺物

PL1



調査区全景



第1号陥し穴



第1号竪穴建物跡
遺物出土状況①

PL2



第1号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第1号竖穴建物跡
竈遺物出土状況



第1号竖穴建物跡

PL3



第1号竪穴建物跡，第1号陥し穴，第9・18・28・39号土坑，遺構外出土遺物

PL4



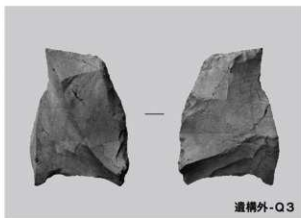
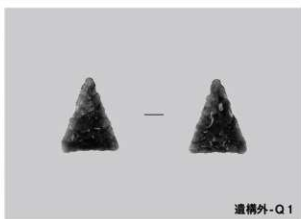
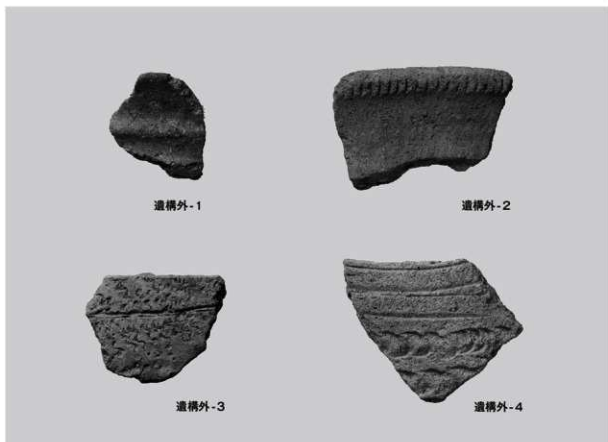
調査区遠景
(北西から)



調査区全景
(北西から)



第1号陥し穴



遺構外出土遺物

PL6



調査区全景
(西から)



第1号竪穴建物跡
遺物出土状況①

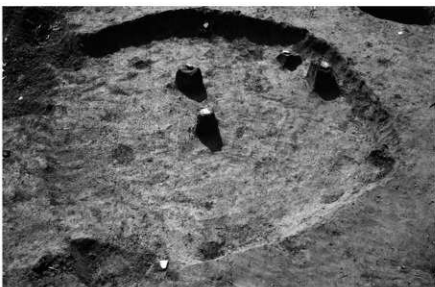


第1号竪穴建物跡
遺物出土状況②

PL7



第 1 号 豎穴 建物 跡



第 6 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



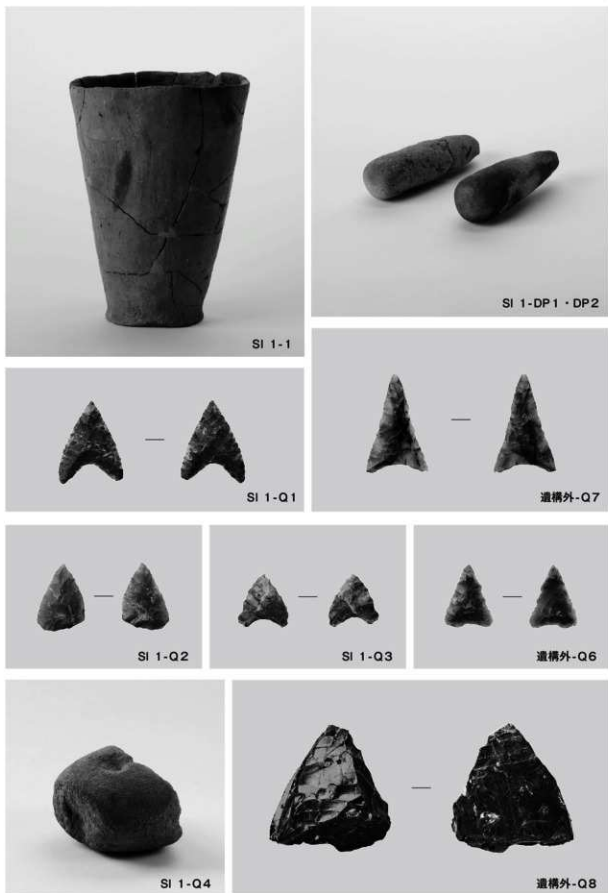
第 26 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况

PL8



第1号竖穴建物跡，第6・25号土坑，遺構外出土土器

PL9



第1号竖穴建物跡，遺構外出土遺物

抄 録

ふりがな	ごみくらいせき かねうちひがしいせき ごみくらしいせき							
書名	埃倉遺跡 鎌打東遺跡 埃倉西遺跡							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第416集							
著者名	天野早苗							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2017(平成29)年3月17日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
埃倉遺跡	茨城県坂東市 弓田字埃倉3479- 2番地ほか	08218 1 227	36度 4分 53秒	139度 54分 47秒	13 ～ 17m	20120601 ～ 20120630	643㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う事前調査
鎌打東遺跡	茨城県坂東市 弓田字猪子1246- 2番地ほか	08218 1 228	36度 5分 2秒	139度 54分 11秒	14 ～ 18m	20130901 ～ 20131031	2,221㎡	
埃倉西遺跡	茨城県坂東市 弓田字埃倉3462- 3番地ほか	08218 1 231	36度 4分 58秒	139度 54分 31秒	13 ～ 17m	20140901 ～ 20141031	2,797㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
埃倉遺跡	狩猟場	縄文	陥し穴 土坑	1基 5基	縄文土器(深鉢) 石器(鏃)			
	集落跡	奈良時代	竪穴建物跡	1棟	土師器(坏・甕), 須恵器(小形短頸壺・壺・甕), 土製品(支脚)			
	その他	時期不明	土溝 土坑	43基 1条	縄文土器(深鉢), 土師器(坏・甕)			
鎌打東遺跡	狩猟場	縄文	陥し穴	1基				
	その他	時期不明	土溝 土坑	61基 5条	縄文土器(深鉢), 土師器(甕) 土師質土器(焙烙・ミニチュア土器), 石器(鏃・磨製石斧), 剥片			
埃倉西遺跡	集落跡	縄文	竪穴建物跡 土坑	1棟 5基	縄文土器(深鉢・浅鉢), 土製品(乳棒状土製品), 石器(鏃・敲石), 石核, 剥片			
	その他	時期不明	土溝 土坑	23基 1条	縄文土器(深鉢), 石器(鏃), 剥片			
要約	埃倉遺跡は、縄文時代には狩猟の場として利用され、奈良時代になると周辺を含め集落が形成されていたと考えられる。鎌打東遺跡からは、逆茂木が立っていた傾跡のある縄文時代の陥し穴が確認されており、狩猟の場として利用されていたと考えられる。埃倉西遺跡からは、縄文時代前期の竪穴建物跡1棟が確認されており、周辺には集落が広がっていたと考えられる。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
編集		Adobe InDesign CS6
図版作成		Adobe Illustrator CS6
写真調整		Adobe Photoshop CS6
Scanning		6×7film EPSON GT-X980 図面類 RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第416集

埃倉遺跡 鐘打東遺跡 埃倉西遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29（2017）年 3月15日 印刷

平成29（2017）年 3月17日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社
〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2
TEL 029-231-4241

